

様式第2号の4-①【(4)財務・経営情報の公表(大学・短期大学・高等専門学校)】

※大学・短期大学・高等専門学校は、この様式を用いること。専門学校は、様式第2号の4-②を用いること。

学校名	神戸女子大学
設置者名	学校法人行吉学園

1. 財務諸表等

財務諸表等	公表方法
貸借対照表	https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/public_info/zaimu_jokyo.html
収支計算書又は損益計算書	https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/public_info/zaimu_jokyo.html
財産目録	https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/public_info/zaimu_jokyo.html
事業報告書	https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/public_info/jigyo.html
監事による監査報告(書)	https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/public_info/zaimu_jokyo.html

2. 事業計画(任意記載事項)

単年度計画(名称: 2025年度事業計画 対象年度: 2025年度)
公表方法: ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/public_info/mokuhyou.html
中長期計画(名称: 第2次中期目標・中期計画 対象年度: 2024~2028年度)
公表方法: https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/public_info/mokuhyou.html

3. 教育活動に係る情報

(1) 自己点検・評価の結果

公表方法: ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/effort/check/index.html https://qa.yg.kobe-wu.ac.jp/?page_id=691 https://qa.yg.kobe-wu.ac.jp/?page_id=94

(2) 認証評価の結果(任意記載事項)

公表方法: ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/effort/check/index.html https://qa.yg.kobe-wu.ac.jp/?page_id=691
--

(3) 学校教育法施行規則第 172 条の 2 第 1 項に掲げる情報の概要

①教育研究上の目的、卒業又は修了の認定に関する方針、教育課程の編成及び実施に関する方針、入学者の受入れに関する方針の概要

学部等名 文学部
教育研究上の目的（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/idea/education-course.html ）
（概要） 文学部における人材育成・教育研究上の目的は、建学の理念に基づき、それぞれの分野の専門的知識および実務的技能を習得することを通し、「自立心」、「対話力」、「創造性」を培い、専門的素養に基づいて、人間、言語、歴史、文化、世界の多様な問題について考える姿勢と能力を育成するものとする。
卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/de-policy.html ）
（概要） 《日本語日本文学科》 日本語日本文学科は、全学共通のディプロマ・ポリシーに基づき、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性・多様性・協働性が、次の基準に達している者に学士（日本語日本文学）の学位を授与する。 【知識・技能】 ・日本語・日本文学および日本文化に関する基礎的な知識・教養を、幅広く体系的に身に付けている。 ・日本語、日本文学、日本文化のいずれかに関する深い専門的知識を修得している。 ・日本語・日本文学および日本文化の研究を通して、「読む・書く・話す・聞く」について高い能力を獲得している。 【思考力・判断力・表現力等の能力】 ・獲得した「読む・書く・話す・聞く」力によって、自分の考えを適切にまとめ、論理的に表現し伝えることができる。 ・収集した情報を客観的に分析し、多様な観点から物事を判断し、日本語、日本文学、日本文化に関する独自の新しい視点・解釈を見出だすことができる。 ・内容や状況、相手、媒体などに応じて目的に適った日本語表現を選び、運用することができる。 【主体性・多様性・協働性】 ・自ら問題を発見し、それを解決するために必要な方策を主体的に構築することができる。 ・伝統的な文化を理解したうえで、社会に広く関心を抱き、自立心を持って社会の多様な場面で、革新的で創造的な活動ができる。 ・他者との協働を可能にする高い対話力と、自ら進んで動く主体的な行動力を身に付けている。 ・日本語学習を必要とする人の多様性を知り、修得した日本語教育に関する知識や技能を用いて社会に奉仕することの意義を理解している。 《英語英米文学科》 英語英米文学科は、全学共通のディプロマ・ポリシーに基づき、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性・多様性・協調性が、次の基準に達している者に学士（英語英米文学）を授与する。 【知識・技能】 ・社会に貢献するための高度な英語運用能力を身に付けている。 ・英語圏の文化・文学の特徴や英語を中心とした言語の仕組みについて専門的な知識を身に付けている。

- ・日本語及び英語で書かれた文献から必要な情報を読み取り、収集した情報を論理的に伝えることができる。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・高度な英語運用能力に基づいて自分の考えを英語で発信し、他者に対して説得力のある説明ができる。
- ・英語圏の文化・文学または英語という言語について自ら研究テーマを見つけ、多角的な観点から分析し、新たな視点で考察することができる。
- ・日本語及び英語で書かれた文献から読み取った情報に基づき、自分の考えを論理的に組み立てて表現できる。

【主体性・多様性・協働性】

- ・高度な英語運用能力と専門的知識に基づき、社会に貢献しようとする責任感を持っている。
- ・英語圏の文化・文学・語学を通して、多様なものの見方や考え方に基づく国際協調の精神を持っている。
- ・対話的な学びを通して、他者と協調・協働して学び合う姿勢を持っている。

《国際教養学科》

国際教養学科は、全学共通のディプロマ・ポリシーに基づき、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性・多様性・協働性が、次の基準に達することにより、国際的な教養を有していると認められる者に学士（国際教養学）を授与する。

【知識・技能】

（グローバルローカル双方向の視点を備えた国際理解）

- ・日本と世界の動きを双方向に俯瞰できる基本的な歴史観と教養を備えている。
- ・国際関係分野における幅広い知識と教養を持ち、グローバルな諸課題への理解と深い関心を持っている。
- ・海外留学先の歴史・文化・宗教・社会構成などに深い関心と基本的な知識を持っている。（言語運用力）
- ・国内外で意見交換や発表ができる基礎的な英語運用力を備えている。
- ・中国語または朝鮮・韓国語によって日常的な交流ができる基本的な運用力を備えている。（実証・実用的な技能・技法）
- ・フィールドワークや聞き取り調査など社会調査に関わる基本的な知識・技法を備えている。
- ・多様な社会経済活動・経営管理に関する基礎的な知識やビジネス情報処理の基本的な技法を備えている。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

（思考力・判断力）

- ・物事を複眼的・多面的に観察・理解しようとする思考力を備え、公正・批判的に判断できる基本的な力を持っている。

（プレゼンテーション力）

- ・自らの主張や意見を口頭あるいは文書によって論理的・説得的に伝える力を持っている。

【主体性・多様性・協働性】

（主体性）

- ・体験から学び、主体的・自立的に問題を発見し解決する基本的な力を持っている。
- ・グローバルな視点を持ちながら、自らの置かれた場で、地域の発展や課題解決に関わろうとする意欲を持っている。

（多様性・協働性）

- ・世界の多様性や他者の多様な価値観を理解し尊重できる素養を備えている。
- ・地域社会に積極的にに関わり、人々と協力・協働して行動できる。
- ・グローバルな時代だからこそローカルの重要性を認識できる視点を備えている。

《史学科》

史学科は、全学共通のディプロマ・ポリシーに基づき、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性・多様性・協働性が、次の基準に達している者に学士（歴史学）を授与する。

【知識・技能】

- ・幅広い歴史的視野と特定の時代・地域に関する専門的知識を身に付けている。
- ・自己の研究課題に関する資史料（文献史料・考古資料・民俗資料など）の所在を調べて広く収集し、読解する技能を有している。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・講義や演習を幅広く受講することにより、正確な知識と論理的な思考力を身につけ、様々な問題をその歴史的背景に照らして客観的に考察する能力を有している。
- ・幅広く歴史学上の専門書や学術論文を精読し、研究上の課題を主体的に発見する能力を有している。
- ・課題解決のために必要な資史料を的確に見きわめることができ、客観的に事実を見定める判断力を有している。
- ・読解した資史料を論理的に分析し、卒業論文の作成を通して自己の課題を解決していく能力を有している。
- ・演習の研究発表ならびに授業のレポートや卒業論文の作成を通じて、正確で論理的な思考力と、口頭と文章による的確な表現力を有している。

【主体性・多様性・協働性】

- ・演習形式の授業に積極的に取り組み、主体的に自己の課題を発見かつ解決できる能力を有している。
- ・多様な歴史学上の視点や学説を積極的に受容し、自立的に自己の視座を確立する能力を有している。
- ・演習や実習を通じて、他者を主導しつつ、共に課題の解決を図ろうとする対話力と協働性を有している。

《教育学科》

全学共通のディプロマ・ポリシーに基づき、基礎・基本となる力の「知識・技能」、考える力としての「思考力・判断力・表現力等の能力」、そして、それらを活用するときの態度に現れる「主体性・多様性・協働性」が、次の基準に達しており、卒業論文の審査に合格した者に学士（教育学）を授与する。

【知識・技能】

- ・教育学・保育学における基本的な知識・技能を修得している。
- ・教育学・保育学における専門的な知識・技能を修得している。
- ・教員としてふさわしい一般教養を身に付けている。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・子どもの成長や発達を多角的な視点から捉えることができる。
- ・子どもの成長や発達を踏まえ、教育・保育の計画や評価を考えることができる。
- ・子どもたちに対して創造的に教育・保育の実践を行うことができる。

【主体性・多様性・協働性】

- ・教育学・保育学の幅広い知識・技能を主体的に修得していく意欲と態度がある。
- ・社会や子どもが持つ多様な価値を尊重し、他者と協調して教育・保育を実践していくことができる。
- ・教員としての使命感と責任感をもって、教育・保育に関わることができる。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：ホームページ

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/cu-policy.html>）

（概要）

《日本語日本文学科》

日本語日本文学科は、学生がディプロマ・ポリシーに定める基準に到達できるよう、次のように教育課程を編成する。

【教育課程の編成】

- ・日本語・日本文学および日本文化に関する知識を学ぶ講義形式と、主体的な学びと対話を重視する演習形式をバランスよく設置し、相互に補完しあう体系を構築している。
- ・「古典文学」「近現代文学」「古典芸能」「コミュニケーション／日本語教育」「日本語学」の5つの分野に、適切に科目を設置している。
- ・「日本文学コース」「古典芸能コース」「日本語コース」の3コースを設置している。この3コースの下に5分野を置き、コースを越えた履修を可能とし、演習（ゼミ）説明会や演習担当教員・クラス担任とのコミュニケーションを通して、自立的・体系的学修を促す。
- ・次の資格や免許などを取得できる科目編成をしている。中学校教諭一種免許状(国語)、高等学校教諭一種免許状(国語)、図書館司書、学校図書館司書教諭、日本語教員養成講座修了証

【教育内容】

1. 学年毎の教育内容

- ・初年次では、「日本文学概論」「日本語学概論」という基礎的な知識習得のための講義と、大学で学ぶための基礎的な技能を習得する「基礎演習」、各分野の基礎的な学びの方法を習得する「入門」によって、2年次以降の学習の基盤を作る。
- ・2年次では、各分野の特色に応じて配した「日本文学史」「芸能史」「日本語文法」の講義や「講読」、必須の「演習Ⅰ」によって専門知識を体系化し、論理的に考え表現する能力の獲得を目指す。
- ・3年次では、各分野の特色に応じて「特講」などを配することによってさらに深い専門的知識を習得し、「演習Ⅱ」によって問題を発見し解決する能力・自己表現能力・コミュニケーション能力を伸ばす。
- ・4年次では、「卒業論文」演習で、深い専門知識の習得とともに思考力表現力を養い、卒業論文を作成して、学びの集大成とする。

2. 科目群毎の教育内容

- ・1年次の「基礎演習」「入門」、2年次の「演習Ⅰ」、3年次の「演習Ⅱ」、4年次の「卒業論文」演習という演習科目群では、一貫して少人数の授業を段階的に高度な内容に展開し、多様な観点から考えたことを論理的に表現し伝える能力、自ら発見した問題を主体的に解決する能力、他者との協働を可能にする対話力を身に付ける。
- ・講義科目群における「日本文学概論」「日本語学概論」では日本語・日本文学および日本文化に関する基礎的な知識を身に付ける。各分野の「講読」及び「日本文学史」「芸能史」「日本語文法」などでは、それらの知識を体系化する。各分野の「特講」でさらに深い専門知識を身に付ける。
- ・講義科目群の学修と「演習Ⅱ」「卒業論文」とを合わせて、日本語、日本文学、日本語教育を含む日本文化のいずれかに関する深い専門的知識を習得し、より高度な「読む・書く・話す・聞く」能力を養う。
- ・3コース5分野の特色に応じて「講読」や「特講」を配し、「日本文学史」「芸能史」「日本語文法」などを設ける。1年次の科目は必修、2年次以降はゆるやかなコース制を取り、講義科目は選択、演習科目は必修とする。そのことにより、多様な領域の専門知識を自立的・体系的に学び、自らが選んだ分野に関する問題を発見してそれを主体的に解決し、創造的な卒業論文を作成する力を養う。
- ・3コース5分野の中の科目の他に、「中国文学講読」などの関連する選択科目を用意し、日本語・日本文学および日本文化に関する知見を幅広く深く学修できるようにする。
- ・外国人に日本語を教える日本語教育関連科目などを通して、異文化理解と共に、多面的

な日本語日本文学の理解を促す。

- ・「基礎演習」、「コミュニケーション特講」などの科目で、社会への関心を深める取り組みを行っている。

【教育方法】

- ・本学科では、自ら見つけた問題点について、調査・分析を加え、論理的に説明することを重視し、学生が主体性を身に付けられるようにしている。特に「演習」では、学生が自ら選択した課題に取り組んで発表を行い、能動的学修を通して、より効果的で論理的な方法に気付いてもらう。また、実地踏査・芸能鑑賞などの場を通して感性を磨き、種々の問題点を発見できるよう促す。
- ・演習科目群では、課題の設定、資料の調査・収集と分析、研究発表と討論を行い、新しい視点や異なる価値観にふれることで、対話力・創造的な思考能力を磨く。
- ・講読・特講科目群では、多様な領域の専門知識・調査や分析の方法・様々な研究方法を紹介し、課題のやりとりを通したきめ細かい指導を通して、研究素材や方法の吟味・選択を選び取る主体的な学修に導き、自ら調べ、考え、表現する力を育てる。
- ・入門・概論科目群では、基礎的な知識・技能の確認と習得及び自立した学修態度を醸成する。そのために、授業に取り組む姿勢や小論文形式の課題提出を重視する。
- ・すべての科目において、学生の抱える問題の早期発見と学科教員による指導を徹底している。

【学修成果の評価方法】

- ・本学科では、個々の主体的で創造的な思考能力を重視する観点から、あらかじめシラバス等で示した配点割合に基づき、多面的な評価基準による評価を重視する。
- ・演習科目群では、各種レポート・プレゼンテーションや能動的な授業参加の観察を通して、特に、思考力・判断力・表現力と主体性・協働性を適正に評価できるようにする。
- ・その他の科目群では、それぞれ「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」の3要素について、各科目の目的に応じた評価基準に基づいて評価する。

《英語英米文学科》

英語英米文学科は、学生がディプロマ・ポリシーに定める基準に到達できるように、次の教育課程を編成する。

【教育課程の編成】

- ・英語英米文学科では、次に示す学科共通科目と2つのコースにより、英語学習の多様な選択機会を与えている。希望者には2年次に海外の協定大学が提供する語学留学で語学力、コミュニケーション力を磨く機会を用意している。
- ・学科共通科目は、「Intensive English Program」、「キャリア英語」、「基礎力養成」の3つの科目群を設置し、英語運用能力の向上と論理的・批判的思考能力や情報処理能力の段階的養成を目指している。
- ・英語関連分野の専門性を深めるために、「英語学・英語教育コース」と「英米文学・文化コース」の2つのコースを用意している。なお、これらのコースについては学生がどちらか一つのコースを選択するわけではなく、各々の興味・関心に合わせて各コースより希望する科目を履修できるようにしている。

【教育内容】

1. 学年毎の教育内容

- ・初年次では、英語の4技能や音声的な特徴等について専門的に学ぶとともに、英米文学や英語学などの学問分野についての基礎的な知識を習得する。また、演習形式による授業で他者と協調して問題を解決する態度を養い、2年次以降の学習の基盤を作る。
- ・2年次では、初年次で身に付けた英語運用能力に基づき、自分の考えを英語で発信する方法を学ぶ。希望者にはハワイ大学での語学留学の機会を提供する。また、選択科目として、英語圏の文学史や英語史、外国語教育についての基礎を学ぶ。
- ・3年次では、2年次までに身に付けた高度な英語運用能力に基づき、他者に対して説得力のある説明を英語で行う能力を身に付ける。また、英語圏の文化・文学または英語を中

心とした言語について自ら課題を見つけ、多角的な観点から分析する方法を学ぶ。

- ・4年次では、日本語と英語の両言語で書かれた文献から必要な情報を読み取り、セミナー内での議論を通して、英語圏の文化・文学または英語を中心とした言語に関する卒業論文を作成し、学びの集大成とする。

2. 科目群毎の教育内容

- ・「Intensive English Program」科目群では、英語を母語とする教員が言語の4技能（「読む」「書く」「聞く」「話す」）の基本学習・応用学習に初年次から一貫してかわり、英語の言語能力の伸長を図る。
- ・「キャリア英語」科目群では、資格試験に準拠した学習を通じて、実践的な英語力を養う。
- ・「基礎力養成」科目群では、英語圏の文化・文学または英語を中心とした言語に関する学問分野の研究手法の基礎を学び、論理的・批判的な思考力を演習形式によって養う。また、教員や他の学生との議論を通して、「英語学・英語教育コース」及び「英米文学・文化コース」で学んだ専門知識を社会に役立てる方法を学ぶ。
- ・「英語学・英語教育コース」では、英語という言語の特性を多角的な視点から理解すること、及びその理解を英語教育に応用し、より良い授業を実現するための方法を学ぶことを目的としている。
- ・「英米文学・文化コース」では、英米を中心とした英語圏社会の文学・歴史・文化の研究を通して、それぞれの社会に固有の特徴について理解を深め、言葉と文化への深い洞察と感受性を磨くことを目的としている。

【教育方法】

本学科では、学生と教員の間だけではなく学生間の自発的な対話を促す学びを重視し、学生が主体性を身に付けられるようにしている。

- ・「Intensive English Program」では、英語を母語とする教員と英語で対話することを通じて、英語運用能力を高めると同時に、学生間の英語による対話を通して学生同士が学び合い、お互いの知識を補いながら、異言語によるコミュニケーションを実践することで、協調性を身に付けられるようにする。
- ・「キャリア英語」科目群では、学生一人ひとりの目標とするキャリアに応じて教員がきめ細かい指導をすることによって、学生の客観的な英語運用能力の向上を目指す。
- ・「基礎力養成」科目群では、学術的な文献の輪読やグループワーク等を通して、教員や他の学生と議論を行い、自分の考えを論理的に組み立てて説明できる力を養う。
- ・「英語学・英語教育コース」では、講義で学んだ知識を基に、教員や他の学生との議論を通して学びの深化を図る。
- ・「英米文学・文化コース」では、教員や他の学生と意見を交換しながら英語圏の文学や文化について学ぶことで、多様な価値観を尊重する態度を養う。

【学修成果の評価方法】

- ・本学科では、対話を重視し、主体性・多様性・協調性を養成する観点から、定期試験やレポートだけでなく、授業内でのディスカッションや発表内容、グループワークでの貢献度等の多角的な視点から学修成果を測定する。
- ・主に知識・技能の養成に関する科目については定期試験による学修成果測定を行う。
- ・主に思考力・判断力・表現力等の能力の養成に関する科目についてはレポートによる学修成果測定を行う。
- ・外部評価試験の受験を各 Semester 1 回以上課し、英語運用能力の推移を客観的に測定する。

《国際教養学科》

国際教養学科は、学生がディプロマ・ポリシーに定める基準に到達できるよう、次のように教育課程を編成する。

【教育課程の編成】

- ・教室で学び考えたことを、学外のフィールドで体験的に学び、フィールドで得たことを

教室に持ち帰る。グローバルな中で、ローカルを考えながら、グローバルに解消されないローカルの重要性についても考える、というように双方向の考え方を実践的に育成することに重点を置いて教育課程を編成する。

- ・国際教養（グローバル・ローカル・スタディーズ・プログラム：GLSP）の基礎を学ぶ講義・演習と、語学（グローバル・コミュニケーション・プログラム：GCP）を中心とした演習、及び海外留学プログラム（オフ・キャンパス・プログラム：OCP）の体験学習をバランスよく設置し、相互に補完しあう体系を構築している。

【教育内容】

1. 学年毎の教育内容

- ・初年次では、実践的な英語とアジアの言語（中国語または朝鮮・韓国語）の基礎を修め併せて世界と地域の関わり、歴史や国際協働の基礎的な知識を学び、情報収集や情報の選択、レポート作成の基礎を学んで、国内外での実地研修に備える。
- ・2年次では、OCP参加に向けて留学先の歴史・文化・言語を学び、留学先での研修・サービスラーニングに参加する。
- ・3年次では、OCPで身につけた国際的知識や教養、技能を統合し、学際的なカリキュラムのなかで、課題を解決し真理を探究する姿勢を修得する。3年次ゼミでは、文献講読や討論、ワークショップ、フィールドワークなどによって研究テーマを設定し、卒業論文テーマ発表会でプレゼンを行う。
- ・4年次では、少人数ゼミ形式で、より専門的な領域において学び、卒業論文を作成し、学びの集大成とする。

2. 科目群毎の教育内容

- ・GCP科目群では、英語とアジアの言語（中国語または朝鮮・韓国語）を修得する。
- ・GLSPは、GLSP入門科目群、GLSP専門基礎科目群、GLSP専門科目群から構成される。
- ・GLSP入門科目群では、ゼミ形式でグローバル・ローカル双方向の視点を備えた国際教養学の基礎を学ぶ。
- ・GLSP専門基礎科目群では、国際的な場において必要な国際教養の専門的知識の基本を習得する。
- ・GLSP専門科目群では、国際的な場において必要な知識をより専門的・学際的に学ぶ。
- ・OCPでは、米国、タイ、中国、台湾、韓国、ドイツの長短期の海外体験留学に参加し、語学研修やサービスラーニングを通して、多様性や地域での協働作業を体験学習する。事前学習として移動・現地での留意点、ホームステイ、現地事情、文化、習慣などを学び、留学中はWeekend Reportを毎週学科に提出するほか、随時OCP担当教員と連絡を取り、旅行なども担当教員が事前チェックするなど、丁寧な指導を行う。OCP参加中は、余暇を利用した旅行の間も含め、常に自ら行動して学ぶ姿勢が求められる。帰国後は事後学習としてOCPの成果をまとめ、OCP発表会でプレゼンを行い、1年次生に対するプレゼンやQ&Aも別に行う。さらにOCPごとに原稿をまとめ、OCP報告集を作成する。

【教育方法】

- ・本学科では、学外体験学習を行うことを重視し、学生が主体的な行動力を身に付けられるようにしている。1年次では必ず全員がフィールドワークを体験し、一般科目やゼミでも学外に出て学ぶことを重視している。またOCPで海外に出ること自体が主体的な行動力を養うことは言うまでもないが、多くのOCPにサービスラーニングを用意し、実地研修を通じて、語学にもコミュニケーション力にも行動力にも学生の成長が観察できる。OCPの中には、留学先大学の語学センターではなく、現地学生とともに本科の講義を受ける本格的な留学プログラムも設けており、主体的な行動力をより大きく伸ばす機会を提供する。
- ・GCP科目群では、少人数クラスで、語学能力差にも配慮した編成とする。
- ・GLSP科目群では、学外研修などを通して体験や実践によって裏打ちされた知識や理論を身につける。
- ・OCPでは、GCPで身につけた語学力とGLSPで学んだ知識や理論を、それぞれの留学先でさらに実践的な運用力を高めるとともに、異文化交流やサービスラーニングを通して文化や価値観の多様性を体験として修得し、協働の精神を涵養する。異文化の地での体験

と知見を持ち帰り、3年次の学び・卒業論文に生かす。

【学修成果の評価方法】

- ・確認テスト、レポート、授業への貢献度、発表内容によって学修到達度を測定する。
- ・英語、中国語、韓国・朝鮮語の外部評価テストを受験し、客観的な語学力の推移を測定する。
- ・留学先でのテーマ設定および留学後のテーマ発表会ならびに報告書作成によって、論理的・説得的なプレゼンテーション力、文章力を評価する。
- ・卒論においては、卒論中間発表会、卒論口頭試問で、論文の書き方、テーマ設定の妥当性、情報収集・分析力、論理的展開と思考力を評価する。

《史学科》

史学科は、学生がディプロマ・ポリシーに定める基準に到達できるよう、次のように教育課程を編成する。

【教育課程の編成】

- ・専門科目を、概論群、講読・実習群、特殊講義群、演習群、卒業論文の5つに分類している。学芸員資格や教員免許の取得に必要な歴史学隣接分野の科目も、専門科目内に多く開設している。
- ・ゆるやかなコース制を実施し、「日本史コース」「外国史コース」「日本考古学・民俗学コース」の3コースを設置し、自己の専門性を高めつつ、幅広く学修できる課程編成を実施している。

【教育内容】

1. 学年毎の教育内容

- ・初年次では、前期に開講する入門演習を必修とし、4年間にわたる大学での勉学の基礎固めとして、文献の調べ方、専門書や論文の読み方、研究発表や質疑応答の方法およびレポートの書き方などを学ぶ。あわせて入門講義である概論科目を多数開講し、幅広い知識を身につけさせる。
- ・2年次では、選択必修である史料講読・実習科目を通じて、実際の資史料から歴史像を描く能力の獲得を目指す。専門ゼミである史学演習を後期から開設し、主体的に学ぶ力や他者と協働して学ぶ力の養成を早くから開始する。
- ・3年次では、史学演習で自らの課題意識に基づく研究発表や質疑応答を通し、課題を主体的に発見し解決する力や対話力の養成につとめる。あわせて特殊講義科目を選択必修とし、最先端の歴史学の成果を身につけさせる。
- ・4年次では、史学演習において各自が定めた研究テーマの成果を発表することで、主体的に学ぶ能力と資史料を収集して読解する能力を養成する。質疑応答を通して対話力を養い、互いに意見を交わすことにより協働的に課題解決に取り組むことの重要性を認識させつつ、卒業論文を完成に導く。

2. 科目群毎の教育内容

- ・概論群では、歴史学に関する幅広い知識と多様な歴史観を身につけさせる。
- ・講読・実習群では、史料講読や歴史的資料の取り扱いを通して、資史料を基に歴史像を描く能力を養成する。
- ・特殊講義群では、歴史学の最先端の講義を通して、自らが課題を設定して卒業論文を作成していく意識を高める。
- ・演習群は、課題を主体的に発見し解決する力と対話力を養成する中心的授業として特に重視し、初年次の入門演習をはじめとして、各年次にもれなく配置している。

【教育方法】

- ・概論群や特殊講義群では、講義形式の授業を通して歴史学上の知識や学説を広く教授する。
- ・講読科目では、史料の輪読や受講生による講読を通して読解能力を養成する。
- ・実習科目では、積極的に史跡や遺物にふれ、臨地体験に基づく歴史研究の場とする。
- ・演習科目では、主体的な研究発表と積極的な質疑応答を通して、歴史学上の各自の課題を発見し、卒業論文作成に向けた鍛錬の場とする。

【学修成果の評価方法】

- ・概論群や特殊講義群では、平常の受講態度に加え、期末の試験やレポート等によって評価する。
- ・講読・実習科目では、平常の理解度をふまえつつ、期末の試験やレポート等によって評価する。
- ・演習科目では、各自の発表内容の独自性や妥当性、発表に対する主体性、質疑応答の積極性・協働性などを見きわめ、適宜レポート等も課して評価する。
- ・卒業論文は、文章表現力や論理的思考力、必要な資史料をもれなく収集する能力、資史料の読解力などを総合的に判断して評価する。その際には、指導教員のほかに副査を加えて口頭試問を実施する。

《教育学科》

学生がディプロマ・ポリシーに定める基準に到達できるよう、次のように教育課程を編成する。

【教育課程の編成】

- ・「初等教育コース」「義務教育コース」「幼児教育コース」の3コースを設置し、学科専門科目は、教育学と心理学の基幹となる「教育学基礎科目群」に加え、各コースの専門科目で構成されており、体系的な学習をする。
- ・他コースの専門科目の履修を許し、各自の興味・関心にしたがって幅広い能力の育成を目指す。
- ・教育実習とは別に小学校、中学校、幼稚園、地域と連携した科目として、学校インターンシップを設置している。
- ・小学校教諭一種免許状、中学校教諭一種免許状（英語）、幼稚園教諭一種免許状、保育士資格の取得のための科目を設置している。また、全学共通教養科目からも、取得を目指す免許・資格の種類に応じて必要な科目を履修する。
- ・その他、学校図書館司書教諭のための科目を設置している。

【教育内容】

1. 学年毎の教育内容

[初等教育コース]

- ・初年次では、教育学に関する基礎科目を受講し、2年次以降の学習の基盤をつくる。
- ・2年次では、小学校の各教科等についてその基礎理論となる科目を受講し、各教科等の指導法を学ぶ。また少人数指導による小学校基礎演習では、小学校教員に求められるコミュニケーション力やソーシャルスキル、プレゼンテーション力、教育者としての観察眼等を養う。さらに学校インターンシップでは、小学校の授業補助を行い、講義で学んだ知識と児童への支援技術体験とを結びつけていく。
- ・3年次では、2年次までに学んだ知識と技術を教育実習、学校インターンシップの体験を通して検証する。また少人数指導による文献講読で教育の専門的テーマについての理解を深めその研究方法・実践方法を修得しながら卒業論文のテーマを決定する。
- ・4年次では、教育学の研究方法の修得とともに、卒業論文を作成し、学びの集大成とする。また教職実践演習では教員として必要な資質能力が形成されたかについて最終的に確認する。

[義務教育コース]

- ・初年次では、教育学に関する基礎科目を受講し、2年次以降の学習の基盤をつくる。
- ・2年次では、小学校の各教科等についてその基礎理論となる科目を受講し、各教科の指導法を学ぶとともに、中学校の英語についての基礎理論となる科目を受講する。少人数指導による小学校・中学校基礎演習では、小学校・中学校教員に求められるコミュニケーション力やソーシャルスキル、プレゼンテーション力、教育者としての観察眼等を養う。さらに、学校インターンシップでは、年間を通して小学校の授業補助を行い、講義で学んだ知識と児童への支援技術体験を結びつけていく。
- ・3年次では、2年次までに学んだ知識と技術を小学校教育実習、学校インターンシップの体験を通して検証するとともに、中学校の英語の指導法等について学ぶ。また、少人

数指導による文献講読で、教育の専門的テーマについての理解を深め、その研究方法・実践方法を習得しながら卒業論文のテーマを決定する。

- ・4年次では、3年次までに学んだ知識と技術を中学校教育実習（英語）の体験を通して検証する。教育学の研究方法を習得して卒業論文を作成し、学びの集大成をする。また、教職実践演習では、教員として必要な資質能力が形成されたかについて最終的に確認する。

[幼児教育コース]

- ・初年次では、教育学・保育学に関する基礎科目を受講し、2年次以降の学習の基盤をつくる。
- ・2年次では、幼児教育についてその基礎理論となる科目を受講し、指導法または保育について学ぶ。また少人数指導による幼児教育基礎演習では、保育者に求められるコミュニケーション力やソーシャルスキル、プレゼンテーション力、保育者としての観察眼等を養う。
- ・3年次では、2年次までに学んだ知識と技術を教育実習、保育実習、発達理解実習での体験を通して検証する。
また少人数指導による文献講読で教育・保育の専門的テーマについての理解を深めその研究方法・実践方法を修得しながら卒業論文のテーマを決定する。
- ・4年次では、教育学・保育学の研究方法の修得とともに、卒業論文を作成し、学びの集大成とする。また教職実践演習では教員として必要な資質能力が形成されたかについて最終的に確認する。

2. 科目群毎の教育内容

- ・「教育学基礎科目群」では、教育学・保育学・心理学における基礎および専門的な知識を身につけ、卒業論文を大学での学びの集大成とする。
- ・教職論では、求められる教師像について考え、教員になるための心構えや対応力を会得し教師としてのあるべき姿を確立する。
- ・教育相談では、自他についての理解やカウンセリングの理論や技法を学び、いじめや不登校等の背景などについて、アクティブ・ラーニングやロールプレイ等を通してその対処を学ぶ。児童一人ひとりに即した支援の方法を探究することで多様な価値観を尊重した問題解決力を養う。
- ・初等教育コース・義務教育コースの専門科目は、教育課程、教科指導法、教科概説、教材研究、教科内容（英語）、生徒指導、教育評価に関する科目と、これらを統合し有機的な理解を深める少人数による教育学講読・演習で構成される。
- ・幼児教育コースの専門科目は、教育課程、保育内容（5領域）、幼児教育指導法、幼児理解、保育課程、保育原理、乳児保育、器楽、造形に関する科目と、これらを統合し有機的な理解を深める少人数による教育学講読・演習で構成される。

【教育方法】

- ・本学科では、本学教育の標語「自立心・対話力・創造性」を掲げ、自立心に富み、対話力と創造性にすぐれた女性の育成を目指す。
- ・1年次に少人数で実施する教育基礎演習においては、教育に関する基礎的知識を広げ、調査や研究のまとめ・発表などの基本的な方法を身につけ、教育学科の学生として研究を行う基盤を養っていく。
- ・2年次に少人数で実施する小学校基礎演習、幼児教育基礎演習と中学校基礎演習は、3年次より始まるゼミのプレゼミ的な性格をもつ。現代の教育および保育についての課題等を各回のテーマとして、ワークショップやグループディスカッション等を行うことで、一人ひとりが学びの主体者となり自ら考え表現する力を醸成する。
- ・芸術科目（音楽・美術）では、教育・保育現場の多様な場面を見据えた実技を行うことにより、創造性を醸成する。
- ・アクティブ・ラーニングの視点に立った授業では、知識の習得だけでなく主体的な学びを促し、他者との協調・協働を取り入れながら独創的な発想を生み出す資質・能力を醸成する。
- ・少人数となるゼミ（講読・演習・卒業論文）では、質問や相談に対してきめ細やかな指

導を行い、実践的な知識と技術を身につけた自己表現力と問題解決力を醸成する。

【学修成果の評価方法】

- ・講義科目および演習科目は、定期試験、発表、レポートなどにより総合的に評価する。定期試験では授業内容の理解と学習到達度を測定・評価し、発表・レポートでは発表内容と成果物の充実度を測定・評価する。
- ・グループワークでは内容的な貢献度も評価する。したがって、学生の自己評価や相互評価も参考にすることもある。
- ・教育学講読・演習については、少人数でテーマに関する報告・議論を行うことを基本としており、その過程と成果について質的な評価をする。
- ・卒業論文については、その作成過程の努力と成果物（論文）を評価するとともに、卒業論文発表会での質疑応答から、主体性、論理性、表現力、独創性などの複数の観点から総合的に評価する。また、卒業論文は本学の学びの集大成となるものであるから、本学の教育の標語「自立心・対話力・創造性」につながる観点からも評価する。
- ・教職に向けての総仕上げである教職実践演習では、学びの履歴を蓄積したポートフォリオ評価等で自身の振り返りを重視した評価をする。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：ホームページ

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/a-policy.html>)

（概要）

《日本語日本文学科》

日本語日本文学科は、カリキュラム・ポリシーで定める教育内容を全うし、ディプロマ・ポリシーで定める基準に達する見込みがある者として、次のような人物を求める。

【知識・技能】

- ・日本語・日本文学および日本文化に関して理解を深めたい人。
- ・高等学校卒業程度の国語に関する知識を備えている人。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・日本語・日本文学および日本文化の歴史的な変遷を視野に入れ、多様な観点から物事を捉えようとする人。
- ・物事を論理的に分析し、適切に表現しようとする人。

【主体性・多様性・協働性】

- ・知的好奇心を持ち、自ら真理を追究しようとする人。
- ・日本文学や古典芸能に関心を持つとともに、それらを取り巻く様々な問題を解決しようとする人。
- ・日本語を用いたコミュニケーションの様態に精通し、対話力を活かした分野で働こうとする人。
- ・外国人のための日本語教育に主体的に取り組み、国際交流に尽力しようとする人。

《英語英米文学科》

英語英米文学科は、カリキュラム・ポリシーで定める教育内容に意欲的に取り組み、ディプロマ・ポリシーで定める基準に達する見込みがある者として、次のような人物を求める。

【知識・技能】

- ・英語の運用能力を身に付けるための基盤となる知識を持っている人。
- ・英語圏の文化・文学や英語を中心とした言語に興味を持っている人。
- ・日本語及び英語で書かれた文章から、必要な情報を読み取ることができる人。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・自らの情報発信力の向上を目標として英語の学習を継続できる人。
- ・英語圏の文化・文学または英語を中心とした言語について積極的に学び、関連する研究テーマに関心を持つ人。
- ・自分の得た知識に基づいて、自分の考えを表現できる人。

【主体性・多様性・協調性】

- ・異文化に関心を持ち、英語学習が人としてのコミュニケーション（対話）能力を身に付

けるためのアプローチを提供することを理解した国際的志向性を持った人。

- ・異文化や他者を尊重し、様々な体験に向き合う姿勢を持った人。
- ・英語圏の文化・文学や英語を中心とした言語に興味を持ち、将来、英語にかかわるキャリアを通して社会に貢献したいと考える人。

《国際教養学科》

国際教養学科は、カリキュラム・ポリシーで定める教育内容を修め、ディプロマ・ポリシーで定める基準に達する見込みがある者として、次のような人物を求める。

【知識・技能】

- ・コミュニケーションのツールとして、英語、中国語または韓国・朝鮮語の修得を目指す人。
- ・国際社会にふさわしい教養とマナーを身につけようとする人。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・社会及び経済の発展、観光、防災、環境問題、地域の活性化などに関して関心を持ち、政策企画・立案・実施できる能力を身につけようとする人。

【主体性・多様性・協働性】

- ・アジア・太平洋地域を始め国際的な場において、人々と協力しながら自分の力を発揮できるよう努力する人。
- ・海外留学や国内外のさまざまな体験学習に積極的に参加する意欲のある人。

《史学科》

史学科は、カリキュラム・ポリシーで定める教育内容を全うし、ディプロマ・ポリシーで定める基準に達する見込みがある者として、次のような人物を求める。

【知識・技能】

- ・歴史についての基礎的な学力を身につけている者。
- ・幅広い歴史的視野と特定の時代・地域に関する専門的知識を身につけようとする意欲を持つ者。
- ・自己の研究課題の解決に必要な資史料をもれなく収集し、読解する技能を身につけようとする意欲を持つ者。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・課題を解決していくために必要な思考力を積極的に身につけようとする意欲を持つ者。
- ・歴史学上の多くの知識を身につけ、研究上の課題を主体的に発見する能力を身につけようとする意欲を持つ者。
- ・課題解決に必要な資史料を的確に見きわめる判断力を身につけようとする意欲を持つ者。
- ・読解した資史料を基に卒業論文を作成し、自己の課題を解決していこうとする意欲を持つ者。
- ・研究発表ならびにレポートや卒業論文に真摯に取り組み、正確で論理的な思考力と、口頭と文章による的確な表現力を身につけようとする意欲を持つ者。

【主体性・多様性・協働性】

- ・授業を積極的に履修し、主体的に自らの課題を発見していこうとする意欲を持つ者。
- ・多様な歴史学上の視点や学説を積極的に受容し、みずからの視座を確立しようとする意欲を持つ者。
- ・他者と共に課題の解決を図るための対話力と協働性を身につけようとする意欲を持つ者。

学部等名 教育学部
教育研究上の目的（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/idea/education-course.html
（概要） 教育学部における人材育成・教育研究上の目的は、豊かな人間性と高い倫理観や道徳性をもち、教育や保育のあるべき姿を協働的に探究し、子どもの人格形成と自己実現を指導し支援できる人材を養成するものとする。
卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/de-policy.html
（概要） 《教育学科》 教育学部教育学科は、基礎・基本となる力の「知識・技能」、考える力としての「思考力・判断力・表現力等の能力」、そして、それらを活用するときの態度に現れる「主体性・多様性・協働性」が、次の基準に達しており、卒業論文の審査に合格した者に学士（教育学）を授与する。 【知識・技能】 ・教育学・保育学における基本的な知識・技能を修得している。 ・教育学・保育学における専門的な知識・技能を修得している。 ・教員・保育者としてふさわしい教養や資質を身に付けている。 【思考力・判断力・表現力等の能力】 ・子どもの成長や発達を多角的・多面的な視点から捉えることができる。 ・子どもの成長や発達を踏まえ、教育・保育の計画を立案し適切に評価することができる。 ・子どもたちの実態に即して創造的に教育・保育の実践を行うことができる。 【主体性・多様性・協働性】 ・教育学・保育学の幅広い知識・技能を主体的に修得していく意欲と態度がある。 ・社会や子どもが持つ多様な価値を尊重し、他者と協働して教育・保育を実践していくことができる。 ・教員・保育者として、使命感と責任感をもって、教育・保育に関わることができる。
教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/cu-policy.html
（概要） 《教育学科》 学生がディプロマ・ポリシーに定める基準に到達できるよう、次のように教育課程を編成する。 【教育課程の編成】 ・「幼児教育コース」「初等教育コース」「義務教育コース」の３コースを設置し、学科専門科目は、教育学と保育学の基幹となる「学科共通基礎科目群」に加え、各コースの専門科目で構成し、体系的な学修をする。 ・他コースの専門科目の履修を可能とし、各自の興味・関心にしたがって幅広い能力の育成を目指す。 ・教育実習とは別に小学校、中学校、幼稚園、地域と連携した科目として、学校インターンシップを配置する。 ・小学校教諭一種免許状、中学校教諭一種免許状（英語）、幼稚園教諭一種免許状、保育士資格の取得のための科目を配置し、特別支援学校教諭一種免許状（知・肢・病）の科目も設置する。また、全学共通教養科目からも、取得を目指す免許・資格の種類に応じて必要な科目を履修する。 ・その他、学校図書館司書教諭のための科目を配置する。

【教育内容】

1. 学年毎の教育内容

[幼児教育コース]

- ・初年次では、教育学に関する基礎科目を中心に、幼児教育の基礎理論の一部を学び、2年次以降の学修の基盤をつくる。
- ・2年次では、幼児教育についてその基礎理論となる科目を受講し、指導法または保育内容について学ぶ。さらに少人数指導による幼児教育基礎演習では、保育者に求められるコミュニケーション力やソーシャルスキル、プレゼンテーション力、保育者としての観察眼等を養う。
- ・3年次では、幼児教育の専門科目を多く学び、3年次までに学んだ知識と技能を教育実習、保育実習での体験を通して検証する。また少人数指導による文献講読で教育・保育の専門的テーマについての理解を深めその研究方法・実践方法を修得しながら卒業論文のテーマを決定する。
- ・4年次では、教育学・保育学の研究方法の修得とともに、卒業論文を作成し、学びの集大成とする。また教職実践演習では教員として必要な資質能力が形成されたかについて最終的に確認する。
- ・特別支援教育については、初年次から4年次まで専門科目を順次学び、4年次の教育実習において障害児の実態と教師の指導について理解を深めると共に、授業観察と授業実践を通して、障害児教育における、授業づくり、教師の支援、一人ひとりへのかかわりについて考察を深める。

[初等教育コース]

- ・初年次では、教育学に関する基礎科目を中心に受講し、小学校教育の基礎理論の一部を学び、2年次以降の学修の基盤をつくる。
- ・2年次からは、小学校の各教科等についてその基礎理論となる科目を受講し、各教科等の指導法を学ぶ。また少人数指導による学校教育基礎演習では、小学校教員に求められるコミュニケーション力やソーシャルスキル、プレゼンテーション力、教育者としての観察眼等を養う。さらに学校インターンシップでは、小学校の授業補助や校務補助を行い、講義で学んだ知識や技能と児童への指導法とを結びつけていく。
- ・3年次では、2年次までに学んだ知識と技能を教育実習、学校インターンシップでの体験を通して検証する。また少人数指導による文献講読で教育の専門的テーマについての理解を深めその研究方法・実践方法を修得しながら卒業論文のテーマを決定する。
- ・4年次では、教育学の研究方法の修得とともに、卒業論文を作成し、学びの集大成とする。また教職実践演習では教員として必要な資質能力が形成されたかについて最終的に確認する。
- ・特別支援教育については、初年次から4年次まで専門科目を順次学び、4年次の教育実習において障害児の実態と教師の指導について理解を深めると共に、授業観察と授業実践を通して、障害児教育における、授業づくり、教師の支援、一人ひとりへのかかわりについて考察を深める。

[義務教育コース]

- ・初年次では、教育学に関する基礎科目を中心に受講し、小学校教育及び中学校教育の基礎理論の一部を学び、2年次以降の学修の基盤をつくる。
- ・2年次からは、小学校の各教科等についてその基礎理論となる科目を受講し、各教科の指導法を学ぶとともに、中学校の英語教育について基礎理論となる科目を受講する。少人数指導による学校教育基礎演習では、小学校・中学校教員に求められるコミュニケーション力やソーシャルスキル、プレゼンテーション力、教育者としての観察眼等を養う。さらに、学校インターンシップでは、年間を通して小学校の授業補助や校務補助を行い、講義で学んだ知識と児童への指導法とを結びつけていく。
- ・3年次では、2年次までに学んだ知識や技術を小学校教育実習、学校インターンシップの体験を通して検証するとともに、中学校の英語の指導法等について学ぶ。また、少人数指導による文献講読で、教育の専門的テーマについての理解を深め、その研究方法・実践方法を習得しながら卒業論文のテーマを決定する。

- ・4年次では、3年次までに学んだ知識と技能を教育実習の体験を通して検証する。教育学の研究方法を習得して卒業論文を作成し、学びの集大成とする。また、教職実践演習では、教員として必要な資質能力が形成されたかについて最終的に確認する。
- ・特別支援教育については、初年次から4年次まで専門科目を順次学び、4年次の教育実習において障害児の実態と教師の指導について理解を深めると共に、授業観察と授業実践を通して、障害児教育における、授業づくり、教師の支援、一人ひとりへのかかわりについて考察を深める。

2. 科目群毎の教育内容

- ・「学科共通基礎科目群」では、「新時代の教育課題」について「現代教育の課題」、「ダイバーシティと教育」、「グローバルイシューと教育」及び「SDGsと教育」の4つの科目により見識を深め、教育や保育を学ぶバックグラウンドを形成する。また、「教育の基礎理解」として教育学・保育学における基礎及び専門的な知識を身に付ける。さらに、教育研究力の育成として、初年度の「教育基礎演習」では、研究にかかる基礎的なスキルや姿勢を学び、2年次の「幼児教育基礎演習」「学校教育基礎演習」では、学校種に応じて実践研究の内容や方法を習得する。そして、3年次の「教育学購読」「教育学演習」で研究課題を明確にして研究活動を進める。「卒業論文Ⅰ・Ⅱ」は大学での学びの集大成とする。
- ・「教育実践力の錬成」として設置している「学校インターンシップ」では、学校等の教育現場における観察から始まり、指導補助に至るまで取り組むことを想定しており、実践的指導力の向上につなげる。
- ・初等教育コース・義務教育コースの専門科目は、教育課程、教科指導法、教科概説、教材研究、教科内容（英語）、生徒指導、教育評価に関する科目で構成する。
- ・幼児教育コースの専門科目は、教育課程、保育内容（5領域）、幼児教育指導法、幼児理解、保育課程、保育原理、乳児保育、器楽、造形に関する科目で構成する。
- ・3コースともに開設される「特別支援学校教諭専門科目」では、特別支援教育にかかる各専門の総論、障害領域を専門的に学ぶ科目で構成される。

【教育方法】

- ・本学科では、本学教育の標語「自立心・対話力・創造性」を掲げ、自立心に富み、対話力と創造性にすぐれた女性の育成を目指す。
- ・初年次に少人数で実施する「教育基礎演習」においては、教育に関する基礎的知識を広げ、調査や研究のまとめ・発表などの基本的な方法を身につけ、教育学科の学生として研究を行う基盤を養っていく。
- ・2年次に少人数で実施する「幼児教育基礎演習」と「学校教育基礎演習」は、3年次より始まるゼミのプレゼミ的な性格をもつ。現代の教育および保育についての課題等を各回のテーマとして、ワークショップやグループディスカッション等を行うことで、一人ひとりが学びの主体者となり自ら考え表現する力を醸成する。
- ・芸術科目（音楽・美術）では、教育・保育現場の多様な場面を見据えた実技を行うことにより、創造性を醸成する。
- ・アクティブ・ラーニングの視点に立った授業では、知識の修得だけでなく主体的な学びを促し、他者との協調・協働を取り入れながら独創的な発想を生み出す資質・能力を醸成する。
- ・少人数となるゼミ（講読・演習・卒業論文）では、質問や相談に対してきめ細やかな指導を行い、実践的な知識と技術を身につけた自己表現力と問題解決力を醸成する。

【学習成果の評価方法】

- ・講義科目及び演習科目は、定期試験、発表、レポートなどにより総合的に評価する。定期試験では授業内容の理解と学習到達度を測定・評価し、発表・レポートでは発表内容と成果物の充実度を測定・評価する。
- ・グループワークでは内容的な貢献度も評価する。したがって、学生の自己評価や相互評価を参考にすることもある。
- ・教育学講読・演習については、少人数でテーマに関する報告・議論を行うことを基本としており、その過程と成果について質的な評価をする。

・卒業論文については、その作成過程の努力と成果物（論文）を評価するとともに、卒業論文発表会での質疑応答から、主体性、論理性、表現力、独創性などの複数の観点から総合的に評価する。また、卒業論文は本学の学びの集大成となるものであるから、本学の教育の標語「自立心・対話力・創造性」につながる観点からも評価する。 ・教職に向けての総仕上げである教職実践演習では、学びの履歴を蓄積したポートフォリオ評価等で自身の振り返りを重視した評価をする。
入学者の受入れに関する方針（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/a-policy.html）
（概要） ≪教育学科≫ カリキュラム・ポリシーで定める教育内容を全うし、ディプロマ・ポリシーで定める基準に達する見込みがある者として、次のような人物を求める。 【知識・技能】 ・大学での履修に必要な基礎的・基本的な知識・技能を備えている人。 ・科学的問題や社会的問題等について広く関心をもっている人。 【思考力・判断力・表現力等の能力】 ・子どもの成長や発達、適切な教育・保育実践について考えようとする人。 ・多くの視点から自分の意見をまとめ、他者に効果的に伝える力を高めていきたいと考えている人。 【主体性・多様性・協働性】 ・教育学・保育学への強い関心を持ち、主体的に学ぼうとする意欲がある人。 ・社会や子どもが持つ多様な価値を尊重しようとする姿勢がある人。 ・他者と協働して教育・保育を実践していく態度を有している人。

学部等名 健康福祉学部
教育研究上の目的（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/idea/education-course.html）
（概要） 健康福祉学部における人材育成・教育研究上の目的は、次のとおりとする。 （1）人材育成の目的 - イ 子どもから高齢者まで福祉社会で求められるあらゆるシーンで、健康と福祉を有機的に連携・理解し、社会が必要とする自立心、対話力、創造性を発揮できる力を持つ人材の育成。 - ロ 複雑、多様化する社会において福祉需要や新たな福祉課題に対応しうる専門性を兼ね備えた人材の育成。 - ハ 人の生涯に亘る健康教育やスポーツを栄養面から支えることの出来る基礎的・専門的知識を身につけた、国際人としても活躍できる有為な人材の育成。 （2）教育研究の目的 - イ 専門的な福祉援助活動や栄養や運動に関わる活動に精通し、生活の質を向上させるための望ましいライフスタイルを提案できる力を育てる。 - ロ 福祉のこころと豊かな人間性を育み、健康教育を推進する社会のリーダーとして幅広いフィールドで活躍し、すぐれた問題解決能力を基に、社会の発展と福祉に寄与する真摯な態度で責任を十分に果たす姿勢や意欲を育てる。 - ハ 地域や国際社会における福祉サービス、健康づくり、食育、スポーツの発展に貢献し、創造性豊かに発展させる能力を育てる。

卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：ホームページ

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/de-policy.html>）

（概要）

《社会福祉学科》

社会福祉学科では、人権尊重・社会正義・人びとのウェルビーイング（福利）・ソーシャルインクルージョン（社会的包摂）・ユニバーサルデザインなどの社会福祉の価値・倫理を身に付けた上で、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性・多様性・協働性が次の基準に達している者に学士（社会福祉学）を授与する。

【知識・技能】

- ・多様な福祉課題を客観的に読み解き、その解決法を見出すために必要な社会福祉の専門的な知識を備えている。
- ・多様な福祉課題の解決に向けて、社会に貢献していくために必要な社会福祉の専門的な技能を身につけている。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・家庭・地域社会・職場などで発生する多様な福祉課題に気づき、それをクリティカルに読み解くために求められる思考力を有している。
- ・多様な福祉課題の解決に向けて、人々の日常生活や社会生活を、福祉の視点で捉えるのみならず、人々の文化的背景も大切にしながら、包括的にマネジメントするために必要な判断力と実践力を有している。
- ・福祉・保健・医療・教育・心理などの専門職から当事者・地域住民まで、幅広い機関・団体や人びととの信頼関係を築き、豊かなコミュニケーションを図るために必要な共感性と表現力を備えている。

【主体性・多様性・協働性】

- ・家庭・地域社会・職場において一市民としての自覚を持ち、また社会福祉専門職としての使命感を持って、社会に貢献していくための主体性を備えている。
- ・現代社会における人びとのダイバーシティ（多様性）を尊重し、すべての人を等しく大切にできる柔軟で寛容な姿勢を有している。
- ・誰もが等しく大切にされる公正な社会を築くために、異なる背景や価値観をもつ人びとも対等かつ民主的な関係性（パートナーシップ）を形成し、協働していく力を有している。

《健康スポーツ栄養学科》

健康スポーツ栄養学科は、全学共通のディプロマ・ポリシーに基づき、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性・多様性・協働性が、次の基準に達している者に学士（栄養学）を授与する。

【知識・技能】

- ・栄養や運動・スポーツを通して、健康の維持や増進に関わることができるようになるために必要な体の仕組みと、病気の成り立ちに関する基礎的・専門的知識を修得している。
- ・食の安全と人の健康に関わる基礎的・専門的知識や、食の安全や機能性に関わる生物学的・化学的な分析技術を修得している。
- ・栄養士として、栄養学的知識はもとより、健康やスポーツ・運動指導に必要な指導力を修得している。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・地域社会や世界で生じる食や栄養、運動・スポーツに関連した諸課題に関心を持ち、課題を考察する思考力を有している。
- ・地域社会や世界で生じる食や栄養、運動・スポーツに関連した諸課題に関心を持ち、課題解決に向けた方策に対する判断力を有している。
- ・地域社会や世界で生じる食や栄養、運動・スポーツに関連した諸課題に関心を持ち、課題解決に向けて周囲の理解や協力が得られるような表現力を有している。
- ・アスリートにまつわる諸課題を見つけ、栄養学やスポーツ科学をもとに解決策を見出すことで、スポーツ・運動分野において貢献しようとしている。

【主体性・多様性・協働性】

- ・食や栄養、運動・スポーツの関わりに常に関心をもち、社会人として自ら学ぶ能力を有している。
- ・個人や家庭、地域社会で生じる食や栄養、運動・スポーツ・教育に関連した多様な課題に対して、周囲と協働して取り組む能力を有している。
- ・多様性を理解し、個々の状況に応じた食や栄養、運動・スポーツ・教育のサポートが出来る能力を有している。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：ホームページ

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/cu-policy.html>）

（概要）

《社会福祉学科》

社会福祉学科では、学生がディプロマ・ポリシーに定める基準に達成できるよう、以下のように教育課程を編成する。

【教育課程の編成】

- ・社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の、3つの国家資格の取得に対応した教育課程を編成する。
- ・課程内に「学科共通」・「社会福祉・精神保健福祉士・介護福祉士専門系」の、大きく2つの科目群を設け、各科目群に適切に科目を配置する。

【教育内容】

1. 学年ごとの教育内容

- ・1年次では、学科教育への導入科目となる「基礎演習」や「ボランティア活動論」を設け、ボランティア活動、地域学習の参加を積極的に推進して社会福祉の基礎を身につけるよう教授する。「基礎演習」では、8名程度の小グループ毎に通年での指導を行う。また、「現代社会Ⅴ」では専任教員がオムニバス形式で、それぞれの専門領域の観点から現代社会福祉の実像を教授する。さらに、全学共通教養科目の履修を通じて、幅広い知識と教養を身につけるよう指導する。
- ・2年次では、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士の各国家資格に準拠した専門教育を充実させる。一方で、国家試験指定科目に特化しない多様な選択科目を設け、グローバル（グローバル+ローカル）な視点から生活、福祉、文化を考える力を身につけるよう教授する。さらにボランティア活動、海外留学などで学習形態の幅を広げるとともに、「社会福祉特講」や「医療福祉論」といった科目を配置し、様々な視点から社会の福祉課題に関心を深めることを目指す。
- ・3年次では、専門分野の深化を図るとともに、国家試験対策を開始する。また「専門演習」等の科目においては、社会福祉領域のなかでもさらに関心の深いテーマについて専門の教員の指導を受ける。さらに、「国際健康福祉プログラム」の履修を通じて、国際的に活躍できる素養を身に付ける。
- ・4年次では、卒業論文を作成する。卒業論文発表会ではプレゼンテーションも行い、4年間の学びの集大成とする。また、3年次から行う国家試験対策をさらに強化して、国家試験合格を目指す。

2. 科目群ごとの教育内容

「学科共通」

- ・人権尊重・社会正義・利用者の最善の利益・ウェルビーイング（福利）等に基づく社会福祉の理念を理解し、福祉の理論や制度、福祉行政について学習する。地域貢献などを通して社会の福祉課題に関心が持てるような教育を行う。さらに、国家資格取得に特化しない多様な選択科目を設定し、グローバル（グローバル&ローカル）な視点に基づく国際交流など多様な教育方法を用い、生活・福祉・文化を考える力を養う。

「社会福祉・精神保健福祉士・介護福祉士専門系」

- ・社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の各国家資格基準に準拠した専門教育を行う。資格別に履修方法を工夫し、社会福祉の専門性の深化を図りながら国家資格の取得を目指す。

【教育方法】

- ・学内での講義・演習の授業で専門知識・技術を身につけるとともに、実習を通じて学んだ知識・技術を応用し統合することで、修得した知識を知恵に転換し、社会福祉専門職としての価値・倫理や、専門職に求められる実践能力を育成する。
- ・社会福祉に関する様々な立場やフィールドに通じることにより、自らも家庭・地域社会・職場における一市民であることの自覚を持ちながら、専門職として使命感を持って社会に貢献していくための主体性を育成する。さらに、異なる背景や価値観をもつ人びとも対等かつ民主的な関係性（パートナーシップ）を形成し、協働していく力を育成する。
- ・実習の前後に履修する演習では、専門職に必要な自己覚知を促すとともに、実践の場で必要なコミュニケーション能力、対人支援能力、問題解決力を育成する
- ・ボランティア活動や地域貢献プロジェクト等を通じて、家庭・地域社会・職場などで発生する多様な福祉課題に気づき、それをクリティカルに読み解くために求められる思考力を育成する。また、様々な立場の人びとも信頼関係を築き、豊かなコミュニケーションを図るために必要な共感性と表現力を育成する。
- ・卒業論文の作成により、これまでに学んだ知識の統合を図るとともに、論文完成に至るプロセスを通じて、問題発見能力・協働性・コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力などを育成する。3年生進級時に、教員の専門テーマを元に学生がゼミを選択し、4年生では、卒業論文テーマを決定し修得した学習内容について研究を深めていく。
- ・国家試験対策については、国家試験等対策室が、それぞれ養成課程ごとに国家試験対策活動計画を立案し、年間を通じて学習支援を行う。受験に向けて、学習グループの形成や自主学習のサポートを行うとともに、模擬試験の実施や、教員による補強講座、挑戦講座、特別講座、外部講師を招聘しての対策講座などを開講する。試験で求められる専門知識等の補強を行いつつ、学習意欲を引き出す重層的な支援を行う。

【学習成果の評価方法】

- ・講義科目では、授業態度、小テスト及び期末最終試験の結果、レポートなどを勘案し、授業内容の理解度や、学習到達度を測定して総合的に評価する。
- ・演習科目では、授業態度、課題への取り組み、授業内での発表の内容、レポートなどから、授業内容の理解度や、学習到達度を測定して総合的に評価する。
- ・実習科目では、まず学生・施設実習指導者・担当教員の三者で行うカンファレンスや、実習記録等に基づき、実習終了時点までの評価を行なう。実習終了後には、実習指導内容、取り組む姿勢、提出した課題、実習指導者の評価を基に、実習報告書作成などを通じて担当教員が総合的に評価する。なお、採点・合否判定の際には、各段階・種別ごとの到達目標に基づき作成する、各養成課程に対応した実習評価表を用いる。実習態度については、実習を通じた体験やグループ活動における主体性や、実践に向けての意識転換、また、第三者への発表や働きかけの内容によって評価をする。
- ・「国際健康福祉プログラム」における海外研修については、研修中に学んだ新しい価値や文化、自らの課題や夢を創造するための能力を、報告書にまとめて発表し、主体性や多様性の修得度について評価をする。
- ・卒業論文については、論文の内容だけでなく、卒業論文発表会におけるプレゼンテーション・発表態度なども踏まえて、総合的に評価する。さらに、論文完成に至るプロセスにおいては、問題発見能力・協働性・コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力などに着目し、評価の対象とする。

《健康スポーツ栄養学科》

健康スポーツ栄養学科は、学生がディプロマ・ポリシーに定める基準に到達できるよう、次のように教育課程を編成する。

【教育課程の編成】

- ・人間栄養学に立脚し、「健康」を支え、「QOL（生活の質）」の向上を図るための「食・栄養」と「運動・スポーツ」について、栄養士としての能力を獲得した人材の輩出を目指すカリキュラム（栄養士養成指定科目）体系を構築している。
- ・栄養に関わる科目のみならず、運動・スポーツの科学的かつ実践的学習ができる科目を

加えており、栄養と運動・スポーツの両面から「健康」に関する専門的教育を行うカリキュラムを編成している。

- ・「栄養士関連科目」「ライフサイエンス関連科目」「健康・福祉関連科目」「スポーツ栄養関連科目」「健康と運動関連科目」「運動・スポーツ指導関連科目」「その他」「導入教育」「単位互換科目」の9つの科目群に、適切に科目を設置している。
- ・「健康栄養コース」「健康スポーツコース」を設置し、体系的な学習を促している。「健康栄養コース」では、栄養士として必要な知識を身につけ、主として人間が健康長寿を全うするために必要な知識を学び、科学的根拠に基づいた実践および指導ができる能力を身に付ける。「健康スポーツコース」では、栄養士として必要な知識を身に付け、主として人間が人生を楽しむため、あるいはアスリートとして競技に臨むため、さらには中高保健体育教諭になるために必要な知識を学び、科学的根拠に基づいた実践および指導ができる能力を身に付ける。

【教育内容】

1. 学年毎の教育内容

- ・初年次では、「食・栄養」を中心とした栄養学総論・調理学・健康医学入門などの導入教育とこれからの4年間に身に付けるべき知識と技術についての概念を形作るための「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」を設定し、大学教育における主体性を身に付け、2年次以降の学習の基盤を作る。さらに、栄養教諭、保健体育教諭を目指す者にはその基礎的知識を身に付ける学年とする。
- ・2年次では、栄養士免許取得のための解剖生理学・食品衛生学・応用栄養学・給食管理実習などの「栄養士 関連科目」と、運動・スポーツについての基礎を学ぶ運動プログラム論・機能運動論などの「健康と運動栄養関連科目」を根幹に設定し、保健体育免許取得のための科目も数多く配置し、健康や運動・スポーツに精通する栄養士となるための知識と技術の獲得を目指す。
- ・3年次では、健康についてグローバルな視野から考えるための「健康・福祉関連科目」と、健康運動実践指導者の資格取得のため、および、運動指針に基づく健康づくりと身体機能の維持・改善について学ぶ「運動・スポーツ指導関連科目」を設定し、健康のスペシャリストとなるための知識と技術の習得を重視する。さらに「専門演習Ⅰ・Ⅱ」では、次年時に行う卒業研究（卒業論文作成）に向けた知識の獲得やテーマの構築・研究態度の養成を行う。
- ・4年次では、「食・栄養」と「運動・スポーツ」の関わりについて専門的知識と専門的技術を身に付け、加えて卒業論文を作成し、学びの集大成とする。

2. 科目群毎の教育内容

- ・「栄養士関連科目」に属する科目群では、健康の維持・増進、疾病の予防についての科学的知識と実践力および指導力を身に付ける。
- ・「スポーツ栄養関連科目」に属する科目群では、運動・スポーツの現場において必要な科学的知識と実践力および指導力を身に付ける。
- ・「運動・スポーツ指導者関連科目」に属する科目群では、球技・水泳・陸上運動・武道などのさまざまな運動・スポーツを通してスポーツの魅力や体を動かす楽しさを体得するとともに、指導力を身に付ける。
- ・「健康と運動関連科目」に属する科目群では、病気の予防や応急手当についてなど健康を維持・増進するために必要な知識と指導力を身に付ける。
- ・「ライフサイエンス関連科目」に属する科目群では、人間社会において必要な経済活動・食品機能などについての知識を身に付ける。
- ・「健康・福祉関連科目」に属する科目群では、地域社会・国際社会における健康・福祉・栄養についての幅広い知識と実践力および指導力を身に付ける。
- ・「資格関連科目」に属する科目群では、本学科において取得可能な資格に関する専門的知識を身に付け、それぞれの資格の取得を目指す。
- ・「その他」に属する科目群では、「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」「専門演習Ⅰ・Ⅱ」「卒業論文」により、大学における学びの姿勢・研究態度の養成・学びの集大成を行う。
- ・「導入教育」に属する科目群では、高等学校における生物・化学の復習から、栄養学へ

の発展（導入）が円滑に行われるように知識の整理を行う。

- ・「単位互換科目」に属する科目群では、他大学における授業を履修することにより、広い視野から自らの専門分野を俯瞰する能力を身に付ける。

【教育方法】

- ・本学科では、本学の教育理念「自立心・対話力・創造性」に基づき、栄養士として、栄養学的知識はもとより、健康や運動・スポーツに必要な食・栄養に関する基礎的・専門的知識および指導技術を有する女性を育てることを重視している。
- ・各科目には、専門的知識と技能を有する専任教員を配置するとともに、きめ細かい教育を行うため、専門的知識と技術を有する非常勤講師や学外特別講師を臨機応変に招聘し、時代に適した人間栄養学を実践する栄養士を養成するカリキュラムを構築している。特に、国内においては、地域に存在するアマチュアまたはプロスポーツチームとの連携・協力、行政との協働、医療施設や食品会社との協同事業への参加など、多くの実践的学修の機会を設けている。小中高の教諭を目指す学生には「栄養と運動の分野から生涯にわたり健康を保てるよう、小中高の児童・生徒の心と身体を育むこと」ができる教育カリキュラムを準備している。さらに国外の大学・施設との交流や共同プロジェクトなども積極的に行っており、学内における通常の学びや実験（実習）の充実のみならず、卒業までに身に付けるべき能力を獲得させることを目指している。

【学修成果の評価方法】

- ・本学科では、試験やレポートならびに実技による評価に加え、グループワークへの貢献度やその内容についても評価を行う。すなわち、単なる知識の取得のみならず、教授された知識を基に、得られた結果について考察する能力を身に付けたか、また、疑問を解決するために成すべき努力を自ら率先して発揮できるかどうか、様々な方法による評価を行う。
- ・卒業論文の作成に当たっては、論文作成への取り組み（研究への積極性・科学的評価の方法・文章作成能力）などについて多様な評価をルーブリックを用いて行い、卒業論文発表会を実施して、客観的評価も行う。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：ホームページ

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/a-policy.html>)

（概要）

《社会福祉学科》

社会福祉学科は、カリキュラム・ポリシーで定める教育内容を全うし、ディプロマ・ポリシーで定める基準に達する見込みがある者として、次のような人物を求めている。

【知識・技能】

- ・高等学校で学んだ基礎的な知識や技能、読解力を備えた者。
- ・人と社会に関心を持ち、積極的に関わろうとする者。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・自分や家族、友人、社会が生活の中で直面している問題を発見し、その解決を探究しようとする者。
- ・課題解決のために情報収集し、それを複眼的・論理的に分析する力を育むことのできる者。
- ・学んだ知識や自分の考えを適切にまとめ、関係者へ発信・調整していくコミュニケーション力を育むことのできる者。

【主体性・多様性・協働性】

- ・自分を大切にでき、他者の価値観についても理解し尊重して、人と力を合わせて他者のために幸せな社会を実現したいと考える者。
- ・社会福祉の価値と倫理を身に付け、家庭・地域社会・職場を基盤として幅広く社会貢献したいと考える者。
- ・社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士等の国家資格を取得し、社会福祉等の専門職として活躍したいと考える者。

《健康スポーツ栄養学科》

健康スポーツ栄養学科は、カリキュラム・ポリシーで定める教育内容を全うし、ディプロマ・ポリシーで定める基準に達する見込みがある者として、次のような人物を求める。

【知識・技能】

- ・基礎学力として高校で履修するすべての科目の勉学に励んだ者。
- ・自然科学や人文科学のみならず、教育学や部活動（課外活動）にも関心を持ち、自主的な活動が行える者。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・栄養学及びスポーツ科学の知識を身に付けたいと考える者。
- ・身に付けた知識を活用して、指導ならびに教育を行いたいと考える者。
- ・自らの考え・意見を論理的にまとめ、社会に発信する力を伸ばしたいと考える者。

【主体性・多様性・協働性】

- ・栄養と運動・スポーツを通して健康づくりに関する企画を立案し、実行したいと考える者。
- ・栄養と運動・スポーツの両面から、共生社会（生徒・児童・アスリート・高齢者・傷病者・他）に貢献したいと考える者。
- ・栄養と運動・スポーツを通して、他の職種の人々とともに、国際社会に貢献したいと考える者。

学部等名 家政学部

教育研究上の目的（公表方法：ホームページ

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/idea/education-course.html>）

（概要）

家政学部における人材育成・教育研究上の目的は、講義と実験や実習などの実体験を有機的に連携させた専門カリキュラムによって、衣・食・住、地球環境、健康問題など、人びとの生活に対して鋭敏な感覚や関心をもち、家政学の専門知識や技能を十分に身に付けさせること、そして、社会に対する視野を広げ、自立心、対話力、創造性を培うことによって、持続可能な平和な世界の構築に貢献できる人材を次のとおり育成する。

卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：ホームページ

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/de-policy.html>）

（概要）

《家政学科》

家政学科は、全学共通のディプロマ・ポリシーに基づき、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性・多様性・協働性が、次の基準に達している者に学士（家政学）を授与する。

【知識・技能】

- ・生活の質の向上と人類の福祉に貢献するための家政学の目的と意義を理解している。
- ・家政学全般についての基本的知識と理解の上に立ち、被服、住居、生活経営の各領域についての専門的知識・技能をもっている。
- ・人文科学、社会科学、自然科学、情報処理等の基礎的な知識をもち、生活に関する問題解決のために活かすことができる。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・社会全体の発展やグローバルな問題について、生活に基盤を置く地道な視点で考察することができる。
- ・社会の問題を発見し、科学的な知識および専門的スキルにより解決に必要な情報を収集・整理・分析する能力をもっている。
- ・個人、家族、コミュニティ、福祉の視点から、より質の高い生活のありようを提案するためのコミュニケーション能力をもっている。

【主体性・多様性・協働性】

- ・社会変化に追従して受動的になりがちな生活の問題点を指摘し、個人や家族の価値を堅持し、主体的で創造的な生活の実現を目指す意欲や実践力がある。
- ・よりよい生活の実現に向けて、他者の多様な価値観を理解して尊重し、円満な人間関係を基盤に人々と協調・協働ができる。
- ・責任ある消費者市民として環境問題や人権問題に配慮した消費行動ができ、啓発活動や企業活動に参画することができる。

《管理栄養士養成課程》

管理栄養士養成課程は、全学共通のディプロマ・ポリシーに基づき、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性・多様性・協働性が、次の基準に達している者に学士（栄養学）を授与する。

【知識・技能】

- ・社会・環境と健康についての知識と理解を基盤とした健康に関する知識を有している。
- ・人体の構造と機能及び疾病の成り立ちについての知識と理解を基盤とした健康と栄養に関する知識を有している。
- ・食べ物と健康についての知識と理解を基盤とした健康と食に関する知識と技能を有している。
- ・臨床病態についての健康と栄養に関する知識と技能を有し、栄養ケアプランの作成ができる。
- ・対象者の状態に沿った食事の調理・提供及び食事・栄養管理ができる栄養と食に関する知識と技能を有している。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・健康、栄養、及び食に関する問題点を発見し、解決に必要な情報を科学的根拠（エビデンス）に基づき収集・整理・分析する能力を有している。
- ・健康、栄養、及び食に関して収集・整理・分析した内容を、他者に適切に伝達するプレゼンテーション能力を有している。
- ・健康増進や疾病予防、治療につながる栄養状態に応じた栄養マネジメントの実施能力を有している。

【主体性・多様性・協働性】

- ・管理栄養士としての職務に対する責任感を身に付けている。
- ・管理栄養士として他者と協調して行動でき、自らの考えを伝えることができる。
- ・管理栄養士として自らの力で課題を発見し、それを解決することで社会に貢献可能な実践力を身に付けている。
- ・健康・栄養問題とそれらを取り巻く自然や社会、経済、文化的要因に興味を持ち、自ら学ぶ意欲を持っている。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：ホームページ

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/cu-policy.html>）

（概要）

《家政学科》

家政学科は、学生がディプロマ・ポリシーに定める基準に到達できるよう、次のように教育課程を編成する。

【教育課程の編成】

- ・家政学科での主な研究分野の基礎となる科目と「卒業研究基礎演習」「卒業研究」を必修科目とし、それ以外の家政学の広範な分野にわたり学習する科目を選択科目とする。
- ・開設科目は家政学全般の学習を可能にするとともに、「被服デザイン科学」、「住空間」、「生活マネジメント」、「家庭科教育」の4つの専門領域を体系的に深く学べるように、専門的な資質・能力の育成に関わる科目を包含した教育課程を編成する。各専門領域を究めるための履修の仕方を示す履修モデルを提示することで、学生はこれを参考に、自分の興味や関心、適性、将来を考えて履修を進め、一人ひとりの主体的な学びを多様に

展開できる教育課程とする。

- ・この教育課程の編成によって、講義形式、演習形式、実験・実習形式、卒業研究等さまざまな教育方法をとることで、理論的知識の教育と実践的な教育の両立を図る。
- ・教職課程を設置し、家庭科の全分野に強い中学校・高等学校の家庭科教員を養成する。家政学に関連する資格取得につながる授業科目を開設する。

【教育内容】

1. 学年毎の教育内容

- ・初年次では、学習の基盤となる学習習慣、言語能力、情報リテラシー、情報活用能力等を身に付け、生活文化や家政学の概要及びその基礎となる科目を学び、家政学の広い分野を知るとともに、将来の進路を展望する。
- ・2年次では、家政学の基礎科目の履修により専門分野の基礎的な能力を身に付けるとともに、学生が自分の関心や進路に合わせて講義科目、実験・実習・演習科目を選択して履修を進める。後期に「被服デザイン科学」「住空間」「生活マネジメント」「家庭科教育」の履修モデルのなかから選択したモデルを申告する。
- ・3年次では、主として選択した履修モデルに対応した科目を中心に履修し、専門分野のより深い知識や技能の習得を目指す。また、後期からは配属された卒業研究のゼミごとに「卒業研究基礎演習」を履修して、研究方法や内容などを学び、4年次の卒業研究につなげる。
- ・4年次では「卒業研究」を履修し、専門分野に関する研究に取り組み、学びの集大成とする。

2. 科目群毎の教育内容

各履修モデルでは以下の内容を学習する。

- ①「被服デザイン科学」：「衣」に関連する分野で活躍できるように、被服と人間との関わりについて幅広く学ぶ。被服の歴史文化や役割、材料、デザイン、人の形態と被服の構造、着心地、被服の洗浄や保管、品質管理、ファッションビジネスなどについて、講義、実験、演習等を通して学び、実践力も身に付ける。
- ②「住空間」：子どもから高齢者まで、すべての人が安心して快適に暮らすことができる社会の実現を目指し、人と環境にやさしく、持続可能な住空間や地域空間について学ぶ。インテリアデザインやCAD、室内環境学、都市デザインなど、理論と実践の両方から学んでいく。
- ③「生活マネジメント」：家計・家族を中心に地域社会との連携を図りながら、より良い生活をマネジメント(経営)する力が身に付くように生活全般を学ぶ。実社会でも実生活でも活かせる専門知識の学習とともに、生活課題解決に取り組むための分析方法やプロジェクトの進め方なども講義や演習を通して学び、実践力も身に付ける。
- ④「家庭科教育」：家庭科の全分野に強い中学校・高等学校の家庭科教員になることを目標に、教員免許取得に必要な科目を中心に、家庭科全般の知識や技能を身に付けるとともに、家庭科指導法や教材開発なども学ぶ。模擬授業や教育実習では、指導案の作成や教材研究などを通して創造力やコミュニケーション能力など教員の資質を磨いていく。

【教育方法】

- ・実験・実習に加え、フィールドワークや調査研究等の実践的な教育活動を重視し、社会的実践課題の解明によって家庭や地域の生活の向上に寄与できる社会性や実践力の育成を目指す。
- ・講義とアクティブ・ラーニング型授業のバランスを図り、人間の生活に関わる基礎知識や専門的な知識を基に様々な課題の探究・解決に取り組み、思考力と自立心・対話力・創造性を育成する。例えば、講義形式の授業では授業支援システムの活用等により事前に資料を読み込むなど課題を確認して授業に参加させ、主体的な知識の習得を促す。講義で習得・理解した知識はアクティブ・ラーニングの学習プロセスで活用し、課題の解決・検証に活かす。また、情報端末やデジタル教材を活用することで探究的・反復的学習を実践する。「フィールドワーク」、「都市デザイン実習」、「室内環境学実験」、「生活プロジェクト演習」等で実施するグループワークや学外活動では、講義・実習等で習得した知識・技能を活用して、広範で批判的な視点から商品企画や地域課題等の創

造的な活動に取り組む。

- ・小グループによる協同学習によって自分とは異なる視点・考え方に触れ、仲間とともに学ぶ喜びや楽しさが実感できるように配慮する。
- ・グローバル化、少子高齢化、技術革新による社会構造や雇用環境の変化等の現代的諸課題に取り組み、持続可能な社会の構築に向けて、衣生活、住生活、生活経営等を横断的・総合的な視点から探究する。

【学修成果の評価方法】

- ・講義科目については、筆記試験、レポート試験、受講態度等、担当教員が授業計画書（シラバス）に示した方法により総合的に評価する。
- ・実験・実習・演習については、レポート、作品、筆記試験、受講態度等、担当教員が授業計画書（シラバス）に示した方法により総合的に評価する。特にアクティブ・ラーニング型授業においては、レポートや発表活動等により、問題発見・課題設定・解決策の構想・実践の評価、さらに考察したことを論理的に表現できているか等に注目して評価する。
- ・学びの集大成となる「卒業研究」は、研究・調査活動に対する取り組み態度、卒業研究の発表、論文内容等に基づいて、総合的に評価する。

《管理栄養士養成課程》

管理栄養士養成課程は、学生がディプロマ・ポリシーに定める基準に到達できるよう、次のように教育課程を編成する。

【教育課程の編成】

- ・管理栄養士養成課程は、厚生労働省の定める管理栄養士養成施設であり、法令に適合した専門基礎分野及び専門分野から構成されたカリキュラムを編成している。
- ・専門基礎分野は、社会・環境と健康、人体の構造と機能及び疾病の成り立ち、並びに食べ物と健康の3科目群から、専門分野は、基礎栄養学、応用栄養学、栄養教育論、臨床栄養学、公衆栄養学、給食経営管理論、総合演習、及び臨地実習の8科目群から構成されている。
- ・これらの他に、教員免許取得のための関連科目、フードスペシャリストなど資格取得のための関連科目を設けている。

【教育内容】

1. 学年毎の教育内容

- ・初年次では、後期履修科目の食品学総論や基礎栄養学などを学ぶ上での基礎となる生物及び化学を前期に学ぶ。また、2年次以降に履修する公衆衛生学や公衆栄養学などを学ぶ上での基礎となる統計学に関する科目を履修し、学習の基盤を作る。さらに、基礎化学実験、調理学実習Ⅰを通して管理栄養士に必要な技能を習得する。
- ・2年次では、主として専門基礎分野の科目の履修を通して専門分野での学習に必要な科学的基礎知識の獲得を目指す。また、解剖生理学実験や生化学実験、食品加工学実習、食品衛生学実験、調理学実習Ⅱ、調理学実習Ⅲ、基礎栄養学実験、公衆栄養学実習を通して管理栄養士に必要な技能を習得する。
- ・3年次では、主として専門分野についての知識の習得を目指す。また、食品学実験、調理学実験、栄養教育実習、給食経営管理実習を通して管理栄養士に必要な技能を習得する。さらに、福祉施設や事業所、保健所などでの臨地実習（公衆栄養学実習、給食経営管理実習）を通して実際の業務や現場を経験することにより、専門的知識と技術の統合を図り、管理栄養士として具備すべき知識及び技能を修得させることによって、管理栄養士という専門職業人としての意識を育成する。
- ・4年次では、3年次に引き続き、専門分野についての知識の修得を目指すと共に、病院での臨地実習（臨床栄養学実習）を通して実際の業務や現場を経験することにより、専門的知識と技術の統合を図り、管理栄養士として具備すべき知識及び技能を修得させることによって、管理栄養士という専門職業人としての自覚を育成する。
- ・3年次後半から4年次にかけて履修する「卒業論文」では、専門分野に関する研究に取り組み、学びの集大成とする。

2. 科目群毎の教育内容

- ・「社会・環境と健康」科目群では、人の健康を保持増進するための社会や環境との関わりについての知識を身に付ける。
- ・「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち」科目群では、人体の構造と機能を系統的に理解すると共に主要疾患の成因や病態、診断、治療などを理解することによって、健康と栄養との関わりについての知識を身に付ける。
- ・「食べ物と健康」科目群では、食品の加工や調理などを経た食べ物を摂取した後の人体に対する栄養面、安全面などへの影響や評価を理解することによって、健康と食との関わりについての知識と技能を身に付ける。
- ・「基礎栄養学」科目群では、栄養の意義について理解し、知識を身に付ける。
- ・「応用栄養学」科目群では、身体状況や栄養状態に応じた栄養管理の考え方を理解することによって、栄養と食との関わり及び運動の役割についての知識と技能を身に付ける。
- ・「栄養教育論」科目群では、健康・栄養状態や食行動、食環境などに関する情報の収集・分析、総合的な評価・判定ができる能力を養い、健康と栄養についての栄養教育活動に関する知識を身に付ける。
- ・「臨床栄養学」科目群では、傷病者の病態や栄養状態に基づいた適切な栄養管理（栄養マネジメント）を行うために必要な総合的なマネジメントの考え方を理解することによって、健康と栄養との関わりについての知識を身に付ける。また、医療・介護制度やチーム医療における役割についても理解を深める。
- ・「公衆栄養学」科目群では、地域や職域などの健康・栄養問題とそれらを取りまく様々な要因に関する情報の収集や分析、総合的な評価・判定を行う能力、知識を身に付ける。
- ・「給食経営管理論」科目群では、栄養・食事管理と経営管理とを中心に、給食の経営管理（マネジメント）や品質管理の基本、集団に応じた健康・栄養政策などを理解し、栄養面、安全面、及び経済面全般のマネジメント能力を身に付ける。
- ・「総合演習」科目群では、臨地実習に当たっての事前教育及び事後教育を通して管理栄養士としての意識の向上を養う。また、各専門分野で修得した知識と技能を統合する総合的な能力を養うとともに、管理栄養士としての実践力を備える。
- ・「臨地実習」科目群では、福祉施設や事業所、保健所、病院などにおいて管理栄養士業務の実践を経験すると共に、臨地実習を通して自ら課題発見や問題解決能力を養う。
- ・「卒業論文」科目では、健康・栄養・食について学んだ知識や技能を基盤として専門的な研究に自ら取り組む意志と態度を養う。
- ・その他、本学科独自の科目群では、管理栄養士に必要な健康・栄養・食についての知識を身に付ける。

【教育方法】

- ・専門基礎分野及び専門分野を学ぶための基礎として、高等学校等での生物又は化学の未履修者を対象にした「特別生物」及び「特別化学」並びに全員必修の「管理栄養士のための生物」及び「管理栄養士のための化学」を開講し、専門基礎分野を学習するための導入教育を行っている。また、管理栄養士の職業に対する理解を深めて就職につながる意識を高めるため、「管理栄養士論」を設けている。
- ・専門基礎分野の「社会・環境と健康」「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち」「食べ物と健康」の各科目群においては、講義や実験・実習を通して基礎的な知識や技能を育成している。
- ・専門分野の「基礎栄養学」「応用栄養学」「栄養教育論」「臨床栄養学」「公衆栄養学」「給食経営管理論」の各科目群においては、講義や実験・実習を通して基礎的な知識や技能を育成している。
- ・専門分野の「総合演習」「臨地実習」の各科目群においては、習得してきた基礎的な知識や技能を実際の現場（福祉施設や事業所、保健所、病院など）において応用するための演習・実習を行うことによって、社会性や協調性を育み、実践力を養っている。
- ・「卒業論文」のための研究・調査を通して、自ら課題を発見する力や論理的な思考力で解決策をまとめ、表現し、伝える力を育むことによって、将来的に社会に貢献できる管理栄養士の育成を目指している。

【学修成果の評価方法】

- ・講義科目に関しては、授業への積極的な参加態度、小テストや試験の結果、場合によってはレポート等の内容を総合的に判断して評価している。
- ・実験・実習・演習科目に関しては、授業への積極的な参加態度や提出されたレポート内容、授業でのテーマに沿ったプレゼンテーションなどの取り組みを総合的に判断し、場合によっては試験によって知識の理解について評価している。
- ・学外での「臨地実習」については、実習先の評価と事前課題への取り組み、報告会での発表、実習ノートへの記載内容等を総合して評価している。
- ・「卒業論文」は、研究・調査活動に対する取り組み態度、公開発表会でのプレゼンテーション力や質疑に対する応答などを参考にし、指導教員が論文内容を総合的に評価している。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：ホームページ

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/a-policy.html>）

（概要）

《家政学科》

家政学科は、カリキュラム・ポリシーで定める教育内容を全うし、ディプロマ・ポリシーで定める基準に達する見込みがある者として、次のような人物を求める。

【知識・技能】

- ・生活を営むために必要な衣食住、家族、保育、消費、環境、家庭と社会との関わり等について学習し、その中で得意な分野をもっている。
- ・高等学校等で習得するレベルの国語、数学、理科、社会、英語の基礎的学力を身に付けている。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・大学で学ぶ基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）を身に付けている。
- ・生活の中から問題を発見するとともに生活者の視点で解決し、これを他者に説明、共有しようとする意欲がある。
- ・持続可能な社会の実現に向けて、主体的に行動する意思決定能力や、家庭や地域の生活を創造する能力、実践的な態度を身に付けたいと考えている。

【主体性・多様性・協働性】

- ・国籍、性別や世代を超え、多様な立場や意見をもつ人々と協力しあって生活を改善し、持続可能な社会を目指して行動を起こしたいと考えている。
- ・家庭生活のマネジメント能力を身に付けたいと考えている。
- ・家政学の専門性を備えたプロフェッショナルとして自立し、中学校・高等学校の家庭科教員や生活関連産業等で活躍したいと考えている。

《管理栄養士養成課程》

管理栄養士養成課程は、高度な知識と技能を持った管理栄養士の養成を目指している。そのためには、カリキュラム・ポリシーで定める教育内容を全うし、ディプロマ・ポリシーで定める基準に達する見込みがある者として、次のような人物を求める。

【知識・技能】

- ・高等学校等で習得するレベルの国語、数学、及び英語の基礎的学力を有する。
- ・高等学校等で習得した生物又は化学に関する知識を生かし入学後に本学科のカリキュラムに沿って生物及び化学の学習やこれらに関連する学習を継続できる基礎的学力を有する。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・健康・栄養・食に関する内容のみならず、さまざまな事象について考え、理解し、まとめることができ、これを他者に分かりやすく説明しようとする意欲を有する。

【主体性・多様性・協働性】

- ・健康・栄養・食に関する問題に関心があり、科学的な知識を習得しようという意欲を有

する。 ・管理栄養士として活躍し、将来的には指導的な役割を担う意欲を有する。

学部等名 看護学部
教育研究上の目的（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/idea/education-course.html） （概要） 看護学部における人材育成・教育研究上の目的は、女性の可能性を拓く豊かな教養と深遠な知の獲得により、様々なコミュニティにおいて自らの役割を果たす判断力と実践力を身につけ、地域や社会の保健医療福祉の場において自立して活動できる看護の専門職を育成する。
卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/de-policy.html） （概要） 《看護学科》 ディプロマ・ポリシーでは、看護学科学士課程で身につけるべき能力（看護実践力・人間力・専門職業人・調整力）をあげ、それを実現するための具体的な学力の要素を示した。以下の能力を身につけ、本学科のカリキュラムに定められた所定の単位を修得した者に学士（看護学）の学位を授与する。 地域の保健医療福祉システムの中で生活している人々に対して看護ケアを自立して行う基礎的能力が身についている。 1. 専門職業人として、生涯にわたって職業創造をしていく基礎的能力が身についている。 2. 医療専門職として、倫理的実践および道徳的態度が身についている。 3. 地域全体の保健医療福祉システムの中で、看護職間や他職種間で連携・協働していく 4. 基礎的能力が身についている。 【知識・技能】 （プロフェッショナルリズム） ・生命、人の尊厳を尊重し、人々の基本的人権を擁護する看護を実践することで、自立した看護専門職としての使命・役割と責務を果たすことができる。 （科学的根拠に基づいた課題対応能力） ・人々の健康増進、疾病の予防、健康の回復、苦痛の緩和のために科学的根拠に基づいた専門的知識と技能が身についている。 （人が病むことへの関心と理解） ・生活者としての視点から病む人に寄り添い、病むことへの理解を深め、集団・地域・社会といったコミュニティと人を育む力が身についている。 【思考力・判断力・表現力等の能力】 （人間性の涵養） ・多様な社会・文化の中で生活している人々への真摯な向き合いから生涯にわたって自己の人間形成を図るとともに、科学的思考、倫理性、国際性が身についている。 （看護の表現力） ・自分との対話や他者との対話、社会との対話を通して自らを律していく力や他者と関わっていく力や社会に提言していく力が身についている。 （倫理的実践と道徳的態度） ・看護実践における倫理の重要性をふまえ、倫理原則、倫理的判断過程、思考方法を学び、看護実習をとおして道徳的態度が身についている。 【主体性・多様性・協働性】 （社会参加）

・社会参加を前提として自ら学び、最新の専門的知識・技能を探究していける。 (協働・協力) ・保健医療福祉の連携の中で協働・協力して自ら活動していける。
教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/cu-policy.html）
(概要) 《看護学科》 看護学科の特色は、総合的存在としての人間への深い関心と理解をもとに、地域で生活している様々な健康レベルの人々のそれぞれの暮らしが成り立っていくように、様々なコミュニティにおいて自らの役割を果たす判断力と実践力を身につけ、地域や社会の保健医療福祉の場において自立して活動できる看護の専門職の能力を培うところにある。 【教育課程の編成】 看護学科の教育課程は、まず、看護師、保健師、助産師に共通した看護学の基礎の上に、それぞれの活躍する場において健康の観点から「人々の暮らしと文化」を支える看護実践能力を養う課程であること、次に卒業後の看護実践能力の発展や継続的向上及び看護師、保健師、助産師としてのキャリアの継続を含めた生涯教育を視野に入れた教育課程であること、さらに看護学の基礎の上に健康教育、健康管理などの分野で活躍できることを視野に入れた養護教諭課程であることを念頭において編成する。 【教育内容】 1・学年ごとの教育内容 ・初年次では、全学共通教養科目の「基礎Ⅰ」において、看護学科の教育理念と教育目標を理解するとともに、大学生として必要とされる基本的な学習方法や態度を学び、さらに看護職が活躍している様々な場や看護職の役割を知って、自分自身の将来像を描き、目標を立てられるようにする。また、主に全学共通教養科目を通して専門職としての基礎力を養うとともに、2年次以降の専門科目を学習するための基盤を作る。 ・2年次では、専門基礎科目と専門科目の講義及び演習・実習を通して、主に看護実践に必要なとなる専門的知識・技能の獲得を目指す。 ・3年次では計10単位の実習を配し、看護実践に必要なとなる専門的知識・技能の獲得を重視する。 ・4年次では、総合実習・課題探究を通して4年間で学んだ知識、技能などを統合するとともに、専門職業人として、看護師、保健師、助産師、養護教諭としてのキャリアの継続を含めた生涯にわたって職業創造をしていく能力を養う。 2. 科目種別毎の教育内容 ・看護教育における演習とは、講義の抽象と実習の具体を結びつけるものである。学生は知識による抽象から実習の具体の間を常に行き戻りしつつも、学び方を学ぶ力を身につける。1年生の前期科目「コミュニティヘルスケア看護技術演習Ⅰ」から基礎看護技術教育を開始し、1年生後期科目から本格的な看護技術演習を展開する。 ・実習は、学生を看護の実践者として、さらには人間としてその可能性を育んでくれる場であり、学生が看護の対象となる病気とともに生きる人、地域で健康を気遣いながら生活している人、さらにはそれらの人々が生活する地域を理解していく場として位置づける。さらに看護学実習は、学生が臨床の場で看護実践過程や医療職の協働・連携を学び、看護の本質を修得していくために欠かせない教育である。本学では、看護学実習で学生が身につけることとして下記の7項目を設定する。 ・対話する力（聞く力・話す力） 1. 看護の対象となる人々の状況に関わる力 2. 苦痛や苦悩を理解する力 3. 子どもから高齢者まで地域で生活している人々から学ぶ力 4. 常に地域の視点をもって看護を展開していく力 5. 看護基礎教育で修得すべき看護の実践力 6. 看護師間や他の医療職等と協働・連携していく力

3. 科目群毎の教育内容

- ・全学共通教養科目は、学生が生涯にわたって自己の人間形成を図る土台を築き、科学的思考、倫理性、国際性を身につけた専門家となるための基礎力を培うことができる内容で構成する。
- ・専門科目は1. 専門基礎科目、2. コミュニティケアシステム領域、3. 医療看護領域、4. 成育看護領域、5. 統合看護科目で構成する。

1. 専門基礎科目

専門基礎科目は、他の学問分野で教養教育科目の中では取り上げられないが、看護学を学んでいく上で必修として学ぶべき科目や、看護学を学ぶ上で基礎的に必要な科目を教授する。ここでは、社会福祉社会保障論・活動論、医療と法、生命倫理、発達心理学、グローバルヘルスと看護、医療英語、コミュニケーション論などを設ける。

2. コミュニティケアシステム領域

コミュニティケアシステム領域は、看護学の構成要素である、人、健康、環境（生活状況を含む）、看護実践の4つの基盤となる概念、看護学の歴史について教授する。さらに、地域医療・保健・看護を推進していくために生活援助学、高齢者看護学、在宅看護学、地域看護学、公衆衛生看護学の看護専門分野を配置し、それを有機的に関連させ統合していくためにコミュニティケアシステム論、予防看護論、看護情報学を設ける。

3. 医療看護領域

医療看護領域は、看護学の基盤である人間の心身の構造や機能、心身の健康増進、病気の予防、病気の治癒・回復を支援していくための看護の専門的な知識と技能を教授する。ここでは、心身の統合体であり、生活者としての人間への理解を基にした看護支援の知識と技能を教授するために急性期看護学・慢性期看護学・治療看護学、精神看護学、看護病態学の看護専門分野を配置し、それを有機的に関連させ統合していくために看護マネジメント論を設ける。

4. 成育看護領域

成育看護領域は、母性・父性、母子、こども、学童・生徒、家族を対象として、健やかな成長、出産や小児期の病気といった健康上の課題や成長発達課題に対して、教育的支援について看護の専門的な知識と技能を教授する。ここでは、小児看護学、家族看護学、母性看護学、助産学を配置する。

5. 統合看護科目

統合看護科目は、1年次から4年次を通して学生が「看護学とは何か」「看護職は何をする人なのか」「看護が対象とするものは何か」「臨床の看護課題は何か」について問い続け、学び、看護の実践者・専門職としての自立を支援していくために教授する。まずそのために、「学びのグループゼミ」を1年次から4年次の共通クラスとする。学びのグループゼミにおいて、1・2年次生は「今、何のために何を学ばなければならないか」を学び、「自分たちの目指すべき目標」を定める。また3年次生は「自分たちの看護実践をプレゼンテーションする」ことで質問や助言を得て実践を吟味することや実践者の責務を学ぶ。4年次生は、1年次から学んだ全ての科目、総合実習（在宅・地域看護）、課題探究（実習を含む）、及び学びのグループゼミにより、看護学の学びを統合していくようにする。

なお学びのグループゼミでは、3年次生をコミュニティのコアグループとし、学習の進展、臨床の知の創出、コミュニティの発展に中心的な役割を果たしていく人と位置づける。一方、4年次生はコーディネーターとして、身近なところで実践の手ほどきを伝授し、相談できるアドバイザーとして活動する。1・2年次生は、コミュニティの中で看護実践に関心を寄せ、自分の実践の中に部分的に活用していきながら、コミュニケーションのとり方、看護実践の倫理や臨床的判断過程を学ぶ。

【教育方法】

- ・看護学科では、教育目標の達成に向けて講義・演習・実習の授業形態を採用する。特に、実習は、学生を看護の実践者として、さらには人間としてその可能性を育んでくれる場、学生が看護の対象となる病気とともに生きる人、地域で健康を気遣いながら生活している人、またそれらの人々が生活する地域を理解していく場ととらえている。また、学生

が臨床の場で看護実践過程や医療職の協働・連携を学び、看護の本質を修得していくために欠かせないものと位置付けている。各実習を履修する前には関連する講義科目、それに関連する演習科目が生まれ、実習での学習が効果的に行えるよう配置する。

- ・必修としている演習科目は7科目ある。1年次で学ぶ2科目（コミュニティヘルスケア看護技術演習Ⅰ、生活援助論）では、主に生活援助に必要な基本的知識を使い、援助を実践していく過程を学習する。看護者側だけでなく、療養者の立場で援助を受ける体験をし、援助を受ける意味を考えるなど、振り返りを通して学べるよう指導する。2年次で学ぶ3科目（治療看護論、コミュニティヘルスケア看護技術演習Ⅱ、成育看護技術演習Ⅰ）、3年次で学ぶ2科目（成育看護技術演習Ⅱ、治療療養支援技術演習）では、主に病気と治療に対する人の反応をアセスメントする方法や看護の対象となる人の生活上・療養上の健康課題に対し、対象者の状況に応じた看護援助を行うことができるように、病室や生活の場を設定した演習室で実践的に学ぶなど、グループワークやロールプレイを用いた事例演習を通して学べるよう指導する。
- ・演習科目では1学年を2グループ（各40名程度）に分けて授業を行うなど、学生が知識とともに技術や態度をより具体的に学べるようにする。
- ・必修としている実習科目は、教育課程の編成の考え方に従って第Ⅰ段階から第Ⅲ段階の構造とする。第Ⅰ段階では、地域で暮らす人々とその地域にあるコミュニティのつながりを知る機会を得ながら、看護の対象となる人々に関心を向けられるよう指導する。第Ⅱ段階では、病気の診断・治療のために入院や通院をしている人々を対象に、健康の回復、苦痛の緩和、疾病の予防、健康の増進を支援する看護過程の展開が学べるよう指導する。第Ⅲ段階では、3年生までに学んだ看護の知識・技術を統合しながら、総合実習で地域・在宅への看護の継続性を学び、さらに課題探究で看護実践を探究できるように指導する。その他選択科目として保健師に関する実習、助産師に関する実習、養護教諭（一種）に関する実習を配置し、それぞれの専門的な活動に必要な知識・技術を習得できるように指導する。
- ・実習科目では看護の実践力を効果的に育むため、1病棟ごとの学生配置を5名程度にするなど、小グループでの学習を行う。

【学修成果の評価方法】

- ・学習成果の測定方法は科目により異なるが、授業に取り組む態度、試験・レポート等を勘案して、講義科目の目標達成度を測定して総合的に評価する。
- ・演習・実習科目については、演習・実習への参加態度、演習・実習内容、実習記録・レポート等に基づき、科目の目標達成度を測定して総合的に評価する。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：ホームページ

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/a-policy.html>）

（概要）

《看護学科》

アドミッション・ポリシーでは、どのような関心や意欲を持った学生を求めているかをあげ、それらを具体的に表わす学力の要素を示した。看護学部では、女性の可能性を拓く豊かな教養と深遠な知の獲得により、様々なコミュニティにおいて自らの役割を果たす判断力と実践力を身につけ、地域や社会の保健医療福祉の場において自立して活動できる看護の専門職を養成する。そのため本学部では次のような人材を求めている。

1. 看護職として社会に貢献する意欲のある人。
2. 人との関わりを大切にしたい人。
3. 自らの成長を希求する人。
4. 文化と看護の融合に関心がある人。

【知識・技能】

- ・人文科学や自然科学へのバランスの取れた関心と勉学に励み、基礎学力を有する人。
- ・学習習慣を身につけ、新たな学問にチャレンジすることができる人。
- ・自身の生活を整える力、自立して生活できる基礎的な力を身につけている人。

【思考力・判断力・表現力等の能力】

- ・本・映画・音楽・スポーツなど人々が生きていくうえで重要な芸術・技能に関心をもつ

人。 ・自分の思いや考えを適切にまとめ、人に伝えることに意欲をもつ人。 【主体性・多様性・協働性】 ・家族・友人・学校・地域・社会との関わりの中で、主体的な行動を積み重ねていくことができる人。
--

学部等名 心理学部
教育研究上の目的（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/idea/education-course.html） （概要） 心理学部における人材育成・教育研究上の目的は、人間の心的過程と行動のメカニズムに深い関心を持ち、社会における人間の多様な営みを心理学の視点から理解し、他者と心理的な交流を深めて協働して活動することのできる人材を養成する。
卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/de-policy.html） （概要） 《心理学科》 心理学部心理学科は、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性・多様性・協働性が、次の基準に達している者に「学士（心理学）」を授与する。 【知識・技能】 ・心理学の方法論を理解し、基本的知識と技能を修得している。 ・人間行動に関するデータを収集し、客観的に分析できる基本的技能を修得している。 【思考力・判断力・表現力等の能力】 ・人間の心と行動を心理学の視点から把握して思考し、調査し、分析する力を身につけている。 ・修得した心理学の知識や技能を、社会生活の場においていかにすれば有効に活用できるか判断する力を身につけている。 ・修得した心理学の知識と技能に基づいて理解・分析した内容を、他者に豊かに伝えることができる表現力を身につけている。 【主体性・多様性・協働性】 ・心理学とそれに関連する諸分野の知識・技能を、主体的に修得しようとする意欲と姿勢を身につけている。 ・人間の多様性を理解し、受け入れ、他者の心に共感していく姿勢を身につけている。 ・修得した心理学に関する知識と技能を、他者と協働して社会において活かそうとする姿勢を身につけている。
教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/cu-policy.html） （概要） 《心理学科》 学生がディプロマ・ポリシーに定める基準を達成できるよう、以下のように教育課程を編成する。 【教育課程の編成】 ・1・2年次を中心にした全学共通教養科目により、すべての学びの「基礎力」や「人間力」を養い、女性としての生き方と自覚を促す。 ・心理学教育としては、概念的知識に関する説明理論が含まれる専門知識科目と、心理学独自の科学的方法として発展してきた方法論に関する科目により心理学の基本的知識と

技能を修得する。

- ・まず、心理学基幹科目により、心理学を学ぶうえで基本的に修得しておかなければならない諸理論を学ぶ。並行して、心理学の実証的・客観的な研究方法についての理解を図り、人間行動に関わるデータを統計的に処理し関係性を分析する心理学的手続きに関して学ぶ。そのような学習を通して心理学の方法論を理解し、基本的知識と技能を修得する。また、人間行動に関するデータを収集し、客観的に分析できる基本的技能を修得する。

【教育内容】

1. 学年ごとの教育内容

- ・1年次前期では、「心理学基礎演習」を必修とし、4年間にわたる大学での心理学に関する勉学の基本的姿勢を修得する。
- ・1年次から2年次にかけて、全学共通教養科目を履修することで、将来の社会人として必要な幅広い教養と語学力を身につける。また、心理学基幹科目として、心理学の概論や主要領域に関する科目を学び、現代の心理学の全体像を把握する。
- ・さらに、心理学の研究方法の基礎と基本的技能を修得し、人間の心理と行動に関わるデータを収集して統計的に処理する技能を身につけていく。
- ・2年次後期からは、学生の多様な関心に沿った学習の道筋を提示するための履修モデルとして、「臨床心理モデル」「経営・消費者心理モデル」「メディア心理モデル」の3つのモデルを示し、学生が各自の関心に沿って専門性を深めることができる科目を配置する。
- ・3年次では、より専門的な科目を学ぶと同時に、「専門セミナーⅠ・Ⅱ」において専門論文を講読したり学生相互での討議をしたりすることを通して、心理学の方法論に基づいた人間の心理と行動の捉え方を探究していく。また、学科横断的な演習科目である「心理学研究総合演習Ⅰ・Ⅱ」において、心理学の知見を実社会へ結び付けていく力を養っていく。
- ・4年次では、「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」において、それまでの3年間で身につけてきた知識と技能に基づき、学生各自が自ら設定した研究テーマについて適切な研究方法を計画し、関係する専門論文を読み込み、データを収集・分析して卒業研究を完成させる。

2. 科目群ごとの教育内容

- ・心理学基幹科目は、心理学を学ぶうえで基本的に修得しておかなければならない諸理論を学ぶ科目群であり、「心理学概論Ⅰ・Ⅱ」の他、「社会・集団心理学（社会・集団・家族心理学）」、「神経・生理心理学」、「知覚・認知心理学」、「教育・学校心理学」、「産業・組織心理学」、「学習・言語心理学」、人間の心理的発達を学ぶ「発達心理学A（青年期・成人期・高齢期）」、「感情・人格心理学」、「臨床心理学概論」などの専門領域に関する講義科目を通して、人間を心理学の視点から捉えていくための基本的理解を身につけていく。
- ・「心理学研究法」「心理学統計法」により、心理学の実証的・客観的な研究方法についての理解を図り、人間行動に関わるさまざまなデータを統計的に処理し関係性を分析する心理学の手続きを修得する。
- ・心理学演習科目は、少人数で構成され、探究するテーマを設定して資料やデータを収集し、あるいは調査を行い、相互にディスカッションして考察を深めていく。
- ・「心理学基礎演習」では、心理学の代表的な知見を取り上げ、どのように研究が行われてきたのかを探ることなどを通して、心理学の研究方法の理解や基本的な学習方法を修得していく。
- ・「心理学実験演習Ⅰ・Ⅱ」において、心理学実験についての基本的技法や心理尺度を用いた研究の基本的技能を身につける。さらに、「上級心理学実験演習Ⅰ・Ⅱ」で、実践的な研究技法を身につけていく。
- ・学科横断的な演習科目である「心理学研究総合演習Ⅰ・Ⅱ」では、学外の地域の人や企業の人との交流を図りながら現場の実際について学び、地域や企業が抱えている課題の解決に向けて学生独自の提案を行っていく。
- ・「専門セミナーⅠ・Ⅱ」においては、心理学に関連する諸領域の中から研究テーマを設

定し、専門論文を精読し、実際に調査を実施するなどして理解を深めていく。

- ・「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」では、各自が学んできた専門領域に関する学びの集大成として卒業研究を行い、心理学に関する研究論文を完成させる。
- ・心理学応用科目は、心理学基幹科目での学びを基盤とし、心理学の各領域に関する専門的知見を一層深める科目群であり、「臨床心理モデル」「経営・消費者心理モデル」「メディア心理モデル」の3つのカリキュラムモデルを学生に提示する。
- ・「臨床心理モデル」では、将来公認心理師を目指す場合に取得すべきカリキュラムとして、「心の脳科学」「心理的アセスメント」「心理検査法実習」「心理学的支援法」「精神医学（精神疾患とその治療）」「発達心理学 B（乳幼児期・児童期）」「家族心理学（社会・集団・家族心理学）」「障がい児・障がい者心理学（障害者・障害児心理学）」「公認心理師の職責」などの科目を配置し、将来において臨床心理的援助を実践する能力の基礎を修得する。また、「臨床心理実習Ⅰ・Ⅱ」では、臨床現場に出向いて公認心理師の職務の実際について体験する。
- ・「経営・消費者心理モデル」では、人間の心理が経済行動や消費行動に与える影響について理解を深められるよう、「行動経済学概論」「サービスデザイン心理学」「産業カウンセリング」「心理調査概論」「消費者心理学」「ビジネスコミュニケーション」「ブランドと人間行動」「交渉の心理学」などの科目を配置する。
- ・「メディア心理モデル」では、現代メディアの特徴やメディアを介した人間の認知の特徴などについての理解を深められるよう、「メディア心理学Ⅰ・Ⅱ」「メディア倫理」「メディアと人間行動」「認知システム論」「メディアとデザインの心理学」「広告心理学」などの科目を配置する。
- ・関連科目は、情報処理に関する知識と技能を身につける科目や、データを統計的に処理し分析する能力を養うための科目を配置し、心理学における実験・調査などを行う技能をより深めることができるようにする。また、現－19－目的と3つの方針について人材育成・教育研究上の代社会において職業人として求められる資質の向上を図る科目などを配置する。

【教育方法】

- ・心理学科では、人間の心理と行動に深い関心を持ち、心理学の視点から自立的に探究し、他者との相互対話を深め、創造的に思考できる学生を育てることを目指す。そのために、講義科目と演習科目、実習科目などを効果的に配置し、心理学の諸理論の理解と、人間の心理と行動を実証的に捉えるための方法論の修得を図る。
- ・学生それぞれの関心に応じたカリキュラムのモデルを示し、将来の進路を見据えて実践的な学習ができるようカリキュラムを編成する。また、学科全体で学ぶ科目を配置することで、総合的な理解力と実践力を養成する。
- ・心理学基幹科目では、心理学の基本的諸領域に関する科目を配置し、人間の心理と行動に関して、心理学の視点からどのように捉えられるかを、具体的・日常的な事象を踏まえながら理解できる力の養成を図る。また、さまざまな情報に関わるデータをどのように処理すれば適切に扱えるか、その基本的な処理方法について具体的に指導する。さらに、心理学における実験の基礎的技能を身につけられるよう、具体的な課題に基づいて行う。
- ・心理学演習科目では、小グループを基本とし、特定のテーマや課題についてディスカッションや協同作業を通して、心理学の研究手法のスキルや考え方の修得を図り、自らの考えを表明し、広くコミュニケーションを図っていくことのできる能力を育てる。また、「心理学研究総合演習Ⅰ・Ⅱ」によって、実際の企業や地域の現実の課題を検討し、解決のためにどのようなことが考えられるか考究する現場の実際を体験していくことで、心理学の視点を現実社会の諸相に具体的につなげていくことのできる力を養成する。
- ・心理学応用科目では、「臨床心理モデル」「経営・消費者心理モデル」「メディア心理モデル」に示された専門科目のいずれかを中心に学習し、自らの関心に沿って専門性を深め、実践的に活かしていくことのできる能力の養成を図る。

【学習成果の評価方法】

- ・講義科目については、筆記試験、レポート試験、受講態度など、担当教員が授業計画書

(シラバス) に示した評価方法により総合的に評価する。 ・実験・実習・演習については、レポート、受講態度、プレゼンテーションの内容など、担当教員が授業計画書(シラバス)に示した評価方法により評価する。 ・学外実習に関しては、実習先の評価、課題への取組、報告会での発表、実習ノートの内容などを総合して評価する。 ・「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」は、研究計画の立て方、研究・調査活動に対する取り組み態度、卒業研究発表会での質疑応答の様子、研究方法と考察の妥当性、論文の論旨の一貫性や深まりなどを総合的に評価する。
入学者の受入れに関する方針(公表方法: ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/policy/a-policy.html)
(概要) 《心理学科》 心理学部心理学科は、カリキュラム・ポリシーで定める教育内容を全うし、ディプロマ・ポリシーで定める基準に達する見込みがある者として、次のような人物を求める。 【知識・技能】 ・人間の心理や行動に関心を持ち、客観的に探究することに関心のある人。 ・高等学校で習得するレベルの基礎的学力を身につけている人。 【思考力・判断力・表現力等の能力】 ・物事を一面的に判断せず、論理的・多面的に考えようとする人。 ・自らの考えを積極的に表現すると同時に、他者の考えを柔軟に聞き取ることのできる人。 【主体性・多様性・協働性】 ・自ら課題を見出し、主体的に解決するための努力を惜しまない人。 ・社会のさまざまな立場の人とコミュニケーションを図ろうと努め、共感する力を持っている人。 ・他者と協働してさまざまな課題に取り組むことができる人。

②教育研究上の基本組織に関すること

公表方法: ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/about/chart.html
--

③教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること

a. 教員数（本務者）							
学部等の組織の名称	学長・副学長	教授	准教授	講師	助教	助手 その他	計
－	3 人	－					3 人
文学部	－	16 人	6 人	7 人	1 人	0 人	30 人
家政学部	－	14 人	10 人	3 人	0 人	11 人	38 人
健康福祉学部	－	13 人	9 人	0 人	0 人	5 人	27 人
看護学部	－	10 人	5 人	6 人	11 人	5 人	37 人
心理学部	－	8 人	2 人	1 人	2 人	3 人	16 人
教育学部	－	21 人	7 人	1 人	0 人	2 人	31 人
b. 教員数（兼務者）							
学長・副学長			学長・副学長以外の教員				計
1 人			257 人				258 人
各教員の有する学位及び業績 （教員データベース等）		公表方法： https://achieve.yg.kobe-wu.ac.jp/kwuhp/KgApp?section=300000					
c. F D（ファカルティ・ディベロップメント）の状況（任意記載事項）							
授業アンケートを中心に、授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な活動を行っている。							

④入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関する事

a. 入学者の数、収容定員、在学する学生の数等								
学部等名	入学定員 (a)	入学者数 (b)	b/a	収容定員 (c)	在学生数 (d)	d/c	編入学 定員	編入学 者数
文学部	240 人	100 人	41.7%	960 人	683 人	71.1%	0 人	1 人
家政学部	230 人	144 人	62.6%	940 人	664 人	70.6%	20 人	5 人
健康福祉学部	160 人	102 人	63.8%	640 人	450 人	70.3%	0 人	1 人
看護学部	90 人	107 人	118.9%	360 人	394 人	109.4%	0 人	0 人
心理学部	80 人	78 人	97.5%	320 人	334 人	104.4%	0 人	0 人
教育学部	130 人	77 人	59.2%	130 人	77 人	59.2%	0 人	0 人
合 計	930 人	608 人	65.4%	3350 人	2602 人	77.7%	20 人	7 人
(備考)								

b. 卒業者数・修了者数、進学者数、就職者数				
学部等名	卒業者数・修了者数	進学者数	就職者数 (自営業を含む。)	その他
文学部	313 人 (100%)	5 人 (1.6%)	290 人 (92.6%)	18 人 (5.8%)
家政学部	223 人 (100%)	4 人 (1.8%)	205 人 (91.9%)	14 人 (6.3%)
健康福祉学部	101 人 (100%)	7 人 (6.9%)	93 人 (92.1%)	1 人 (1.0%)
看護学部	90 人 (100%)	0 人 (0%)	89 人 (98.9%)	1 人 (1.1%)
合計	727 人 (100%)	16 人 (2.2%)	677 人 (93.1%)	34 人 (4.7%)
(主な進学先・就職先) (任意記載事項)				
(備考)				

c. 修業年限期間内に卒業又は修了する学生の割合、留年者数、中途退学者数 (任意記載事項)					
学部等名	入学者数	修業年限期間内 卒業・修了者数	留年者数	中途退学者数	その他
文学部	321 人 (100%)	291 人 (90.7%)	7 人 (2.2%)	23 人 (7.2%)	0 人 (0%)
家政学部	230 人 (100%)	215 人 (93.5%)	6 人 (2.6%)	9 人 (3.9%)	0 人 (0%)
健康福祉学部	111 人 (100%)	97 人 (87.4%)	4 人 (3.6%)	10 人 (9.0%)	0 人 (0%)
看護学部	93 人 (100%)	86 人 (92.5%)	3 人 (3.2%)	4 人 (4.3%)	0 人 (0%)
合計	755 人 (100%)	689 人 (91.3%)	20 人 (2.6%)	46 人 (6.1%)	0 人 (0%)
(備考)					

⑤授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること

(概要)
文部科学省、厚生労働省より指定された授業内容等に沿ってシラバスを作成し、教務委員による点検を経た後に、ホームページで公開している。なお、学生は学内ポータルサイトから閲覧することができる。また、各資格のシラバスガイドラインを作成し、ホームページで公開している。シラバスには、各学科のディプロマポリシーとカリキュラムポリシーを含めた3つのポリシーを意識した作成を進めている。

⑥学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること

(概要) 成績評価及び卒業については、学則、神戸女子大学履修規程等で定めている。成績評価として、秀 (100-90 点)、優 (89-80 点)、良 (79-70 点)、可 (69-60 点)、不可 (60 点未満) と評価段階を定め、その評価方法についてもシラバスに明記している。修業年限以上在学し、所定の単位数を修得した者には、学長が卒業を認定する。				
学部名	学科名	卒業又は修了に必要な単位数	G P A 制度の採用 (任意記載事項)	履修単位の登録上限 (任意記載事項)
文学部	日本語日文学科	124 単位	有	48 単位
	英語英米文学科	124 単位	有	48 単位
	国際教養学科	124 単位	有	48 単位
	史学科	124 単位	有	48 単位
教育学部	教育学科	124 単位	有	48 単位
家政学部	家政学科	124 単位	有	48 単位
	管理栄養士養成課程	124 単位	有	49 単位
健康福祉学部	社会福祉学科	124 単位	有	49 単位
	健康スポーツ栄養学科	124 単位	有	49 単位
看護学部	看護学科	124 単位	有	49 単位
心理学部	心理学科	124 単位	有	46 単位
G P A の活用状況 (任意記載事項)		公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/public-information/result.html		
学生の学修状況に係る参考情報 (任意記載事項)		公表方法：ホームページ https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/public-information/questionnaire.html		

⑦校地、校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること

公表方法：ホームページ (須磨 C) https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/campuslife/campus/suma.html (ポートアイランド C) https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/campuslife/campus/pi.html

⑧授業料、入学金その他の大学等が徴収する費用に関すること

学部名	学科名	授業料 (年間)	入学金	その他	備考（任意記載事項）
文学部	日本語日本文学科	850,000 円	200,000 円	260,000 円	左記：教育・施設充実費 初年度は 220,000 円
	英語英米文学科	850,000 円	200,000 円	260,000 円	左記：教育・施設充実費 初年度は 220,000 円
	国際教養学科	850,000 円	200,000 円	260,000 円	左記：教育・施設充実費 初年度は 220,000 円
	史学科	850,000 円	200,000 円	260,000 円	左記：教育・施設充実費 初年度は 220,000 円
	教育学科	850,000 円	200,000 円	340,000 円	左記：教育・施設充実費 2025 年度より募集停止
教育学部	教育学科	850,000 円	200,000 円	340,000 円	左記：教育・施設充実費 初年度は 290,000 円
家政学部	家政学科	850,000 円	200,000 円	390,000 円	左記：教育・施設充実費 初年度は 330,000 円
	管理栄養士養成課程	850,000 円	200,000 円	440,000 円	左記：教育・施設充実費 初年度は 370,000 円
健康福祉学部	社会福祉学科	850,000 円	200,000 円	370,000 円	左記：教育・施設充実費 初年度は 290,000 円
	健康スポーツ栄養学科	850,000 円	200,000 円	410,000 円	左記：教育・施設充実費 初年度は 350,000 円
看護学部	看護学科	1,000,000 円	200,000 円	700,000 円	左記：教育・施設充実費 初年度は 600,000 円
心理学部	心理学科	850,000 円	200,000 円	340,000 円	左記：教育・施設充実費 初年度は 290,000 円

⑨大学等が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

a. 学生の修学に係る支援に関する取組
（概要） 全ての学生が入学から卒業まで心身ともに健康かつ安全な学生生活を過ごせるよう、教職員が連携し、きめ細やかな支援を行っている。修学支援については学修の基本姿勢などを、生活支援については施設利用の方法などを、学生に配付する『履修の手引き』及び『学生生活の手引き』等で明示している。 留年者、休・退学者への対応については、クラス担任が該当学生との面談を実施し、状況把握や留年防止のために取り組んでいる。また、補習・補充教育として、「学習支援センター」で基礎科目講座を開講し、担当教員による個別相談も実施している。経済的支援としては、独自の奨学金制度や授業料免除制度を整備している。なお、障がいのある学生等、配慮を要する学生については、独自に制定した教職員対象の合理的配慮ハンドブックに基づき、学生支援センターのコーディネーターが、関係教職員及び外部支援機関と連携のうえ、総合的かつ個別的支援を行っている。 さらに毎年度学生生活調査を実施し、PDCA（Plan-Do-Check-Act）サイクルに従った学生生活を支援する大学環境の改善を行っている。
b. 進路選択に係る支援に関する取組
（概要） 各学科学生の適性や志向に対応し大学と社会の円滑な接続を目指している。初年次は、キャリア教育科目と資格取得講座を配置し、学生生活全体をデザインし、充実した大学生活を送ることを目指す。3 回生からは、全員に対して個人面談を実施し、進路の希望や悩みをヒアリングすることで、より本人の希望に沿った進路選択ができる土台を形成する。年間の就職支援行事として自己分析や企業・業界研究、専門職就職対策、エントリー会などのガイダンスも実施。また個別指導については、添削や面接練習を対面とオンラインを併用し、自宅で

も可能となるよう便宜を図っている。学内企業研究会では、200社以上の企業に参加いただき、延べ800名以上の学生が参加している。

c. 学生の心身の健康等に係る支援に関する取組

(概要)

学生相談室

学生相談室では、臨床心理士が、対人関係・学業・将来・その他生活全般などについて、なやみの相談に応じている。

保健室

保健室は、学生の健康保持増進を図るため、健康診断・健康相談・救急処置・感染症対策など、健康管理のサポートを行っている。また、身体測定・血圧測定・健康情報が得られるなど、学生が自分の健康を考える場として気軽に利用できる。

⑩教育研究活動等の状況についての情報の公表の方法

公表方法：ホームページ

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/wu/guide/public-information/index.html>

備考 この用紙の大きさは、日本産業規格A4とする。